

五反田地区村道開設に伴う  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

あ じま ご たん だ い せき  
**阿島五反田遺跡**

2011年3月

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

五反田地区村道開設に伴う  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

あ じま ご たん だ い せき  
**阿島五反田遺跡**

2011年3月

長野県下伊那郡喬木村教育委員会



III調査区出土長頸壺形土器



B地区竖穴9出土臺形土器口緣

## 序 文

この発掘調査報告書は、喬木村で村道開設と宅地造成の計画が立てられたため、平成22年5月から3ヶ月かけて実施した阿島五反田遺跡の発掘調査をまとめたものであります。

阿島五反田遺跡は、昭和10年に筒形土器が発見され大変珍しい土器として日本考古学会に発表され、「阿島式土器」と命名された経緯があります。その後昭和24年には瓢箪形・双口土器の出土があり、昭和36年には下伊那教育会郷土調査部により試掘調査も実施されているところです。今回の調査でも「阿島式土器」の出土が大いに期待された調査となりました。

この調査の詳細についてはこの報告書をお読みいただくとして、今回弥生時代中期の溝状遺構に土器集中地が出土したこと、弥生時代後期の合わせ土器棺や数多くの阿島式土器破片の出土があり、成果を上げることができました。平成23年度にも近隣の発掘調査を予定しております期待を寄せております。

発掘調査にあたり、調査の細部までにわたりまして、ご指導をいただきました団長の今村善興先生をはじめ、梅雨時から一転して猛暑が続いた時期でしたが、発掘作業に懸念的にご協力をいただいた作業員の方々、また、快くご協力をいただきました地元の方々に心からの感謝を申し上げます。

今後、本報告書が発掘調査の研究活動に活用されることを願い、発刊の言葉といたします。

平成23年3月

喬木村教育委員会

教育長 原 三 雄

## 例　　言

1. 本報告書は、平成22年に喬木村教育委員会が実施した、五反田地区村道開設に伴う喬木村阿島五反田遺跡の発掘調査報告書である。
2. この発掘調査は、喬木村教育委員会が委嘱した特設の五反田遺跡発掘調査団が行っている。
3. 住宅造成区域と道路造成区域があるが、道路造成区域に限定して発掘調査が行われている。
4. 本報告書作成に当たっては、遺構測量は㈲M 2クリエーションに委託し、弥生時代中期・後期の個体土器・石器の実測も同社に委託している。遺構全体写真は㈲M 2クリエーションに委託している。
- 五反田地域の地形考査については、松島信幸氏に報告を依頼している。
5. 遺構図整理、弥生時代後期・古墳時代・平安時代の土器実測、拓本撮り、報告本文執筆は今村が担当し、喬木村埋蔵文化財包蔵地図・表は市瀬が、五反田井の執筆・協力者の声編集は大原が担当執筆している。
6. 遺物・測量原図・調査記録カード・写真関係資料は喬木村教育委員会が、喬木村歴史民俗資料館に保管している。

## 調査団組織

### 1. 調査事務局

教育長	原 三雄
事務局長	市瀬 直史
社会教育係	林 浩樹 木下 哲也

### 2. 調　　査　　団

調査団長	今村 善興
調　　査　　員	市瀬 辰春 大原 成章

協力作業員	小林 武司 潟沢 俊夫 小沢 義久
	三浦 隆夫 池田 一夫 宮下 文雄
	土井 高司 小池多美子 今村 俱栄

# 目 次

## 序 文

## 例 言

## 調査団組織

I 調査の経過 .....	1
1. 昭和年代の土器出土 .....	1
2. 平成22年の発掘調査の経過 .....	1
II 五反田遺跡周辺の環境 .....	3
1. 阿島式土器時代の自然環境 ーとくに地形発達を中心に .....	3
2. 五反田井 .....	6
3. 阿島地籍の史跡・遺跡 .....	6
III 調査の結果 .....	12
1. 調査区と調査方法 .....	12
2. 調査結果の概要 .....	12
3. 検出された遺構・遺物 .....	14
(1) 弥生時代中期（主として阿島式土器を伴う）遺構と遺物 .....	14
『A地区』 .....	14
① 溝状遺構土器集中地 (図4～15) .....	14
ア 溝状遺構1 (図4・5・14) .....	14
イ 溝状遺構2 (図4・5・6・7・8・10・11) .....	14
ウ 溝状遺構4 (図4・17) .....	15
エ 集石遺構 (図4) .....	16
オ 下層の礫層 .....	16
『B地区』 .....	32
② B地区の遺構と遺物 .....	32
③ 弥生時代中期の遺構と遺物 .....	32
ア 積穴状遺構9 (図19・20・21・22・23) .....	32
イ 積穴状遺構11 (図19・20・21・24・25・26) .....	32
④ 変形土器のいろいろ (図30・31) .....	33
⑤ 石器の分類 (図33・34・35・36) .....	33
(2) 弥生時代後期の遺構と遺物 .....	52
① 合わせ土器棺 (図5・37) .....	52
② 土器集中地 (図38) .....	52

③ その他の地域 .....	53
(3) 古墳時代の遺構と遺物 .....	56
① 6号住居址(図4・5・39) .....	56
② 溝状遺構3(図4・39) .....	56
③ 5号住居址(図40・41) .....	56
④ 10号住居址(図40) .....	57
⑤ 周溝を持つ土盛り状の遺構(図19・21・42) .....	57
⑥ 土坑状の遺構 .....	57
(4) 平安時代の遺構・遺物 .....	62
① 4号住居址(図19・21・40・43) .....	62
② 配石遺構(図40・44) .....	62
(5) 試掘調査の遺物 .....	62
① 第一工区B地区の遺物 .....	62
② 第二工区の遺物 .....	63
(6) 旧五反田井 .....	63
写真図版 .....	68
IVまとめ .....	84
V協力者の声 .....	86
1. 五反田遺跡の発掘に携わって .....	歴史民俗資料館市瀬辰春 86
2. 五反田遺跡発掘調査に従事して .....	大原成章 86
3. 阿島五反田遺跡発掘調査に参加して .....	土井高司 86
4. 五反田遺跡発掘作業に参加させて戴いて .....	小沢義久 87
5. 五反田遺跡発掘に参加して .....	池田一夫 87
6. 繊細な作業 .....	湯沢俊夫 88
7. 水洗いについて .....	今村俱栄 88
報告書抄録 .....	89

## 図版目次

図1 五反田遺跡出土の阿島式土器 .....	2
図2 阿島地籍の埋蔵文化財包蔵地図 .....	8
図3 五反田遺跡の調査区 .....	9

図4	A地区下層の遺構全体図	17
図5	A地区溝状遺構1・2周辺の遺構図	18
図6	A地区溝状遺構1・2周辺の遺構図	19
図7	A地区溝状遺構2出土壺形土器	20
図8	A地区溝状遺構2出土壺形土器	21
図9	A地区溝状遺構2 No.25出土土器	22
図10	A地区溝状遺構2 No.16出土土器(1)	23
図11	A地区溝状遺構2 No.16出土土器(2)	24
図12	A地区溝状遺構2 No.16・10・11出土土器	25
図13	A地区溝状遺構2 No.12・15出土土器	26
図14	A地区溝状遺構1出土土器	27
図15	A地区溝状遺構4出土土器	28
図16	A地区各グリッド出土土器	29
図17	A地区出土朱彩土器	30
図18	B地区出土朱彩土器	31
図19	B地区遺構全体図	35
図21	B地区竪穴8・9竪穴11遺構図	36
図22	B地区竪穴9出土 壺形土器	37
図23	B地区竪穴9出土壺形土器	38
図24	B地区竪穴11出土土器(1)(B16・17)	39
図25	B地区竪穴11出土土器(2)(B17)	40
図26	B地区竪穴11出土土器(3)(B18)	41
図27	B地区各グリッド出土土器(1)	42
図28	B地区各グリッド出土土器(2)	43
図29	調査区Ⅲ、郭遺跡出土土器	44
図30	変形土器の分類(1)	45
図31	変形土器の分類(2)	46
図32	壺形土器の底部	47
図33	A地区溝状遺構2出土石器 No.15、16、25	48
図34	A地区溝状遺構1・4ほか出土石器	49
図35	B地区9号竪穴と北側出土石器	50
図36	B地区11号竪穴グリッド4・5出土石器	51
図37	A地区溝状遺構1出土土器(合わせ土器棺)	54
図38	A地区出土弥生時代後期の土器	55
図39	A地区溝状遺構3、6号住居址出土土器	58
図40	B地区5号・4号住居址、配石遺構	59
図41	B地区5号住居址出土土器	60
図42	B地区周溝状遺構出土土器	61

図43 B地区4号住居址出土土器	64
図44 B地区12~15地点出土土器	65

## 写真図版目次

写1 A地区溝状遺構1・2と土器集中地	68
写2 A地区溝状遺構3・4と集石遺構	69
写3 A地区溝状遺構1土器集中地	70
写4 A地区土器集中地 №25 壺形土器出土状況	71
写5 A地区土器集中地 №16出土土器	72
写6 №25出土土器	73
写7 B地区竪穴9出土 壺形土器口縁部	74
写8 A・B地区朱彩土器口縁部	75
写9 A地区下層の礫層	76
写10 B地区4号住居址の配石と竪穴9	77
写11 B地区竪穴11(検出中)	78
写12 A地区合わせ土器棺(壺形土器と変形土器)	79
写13 A地区溝状遺構3	80
写14 B地区5号住居址	81
写15 B地区配石遺構	82
写16 調査団の面々	83

## 表 目 次

表1 喬木村埋蔵文化財包蔵地一覧	10
喬木村阿島地区古墳一覧	11
表2 遺構一覧	13
表3 出土した阿島式土器の数	13
表4 五反田遺跡出土石器の表	34

# I 調査の経過

## 1. 昭和年代の土器出土

喬木史談会叢書No.4『阿島式土器』によると、昭和10年に久保田敬三さんが筒形土器を発見され、喬木第一小学校に保管されていた。(図3-6)これは大変珍しい土器として、大沢和夫先生が日本考古学会に発表され、「阿島式土器」と命名された。その後大平宗一さん所蔵の瓢箪形・双口土器3個(図3-7・8・9)を含めて「阿島式土器」の代表的な遺物とされている。(調査地I・II)

昭和36年に591番地で、下伊那教育会郷土調査部によって試掘調査が行われた。上層から古墳時代・弥生時代後期の土器が收拾され、表土下1m80cmの所から阿島式土器を伴う住居址が発見され、長頸壺形土器3個(図3-1・2・3)が発掘されている。(調査地III)

## 2. 平成22年の発掘調査の経過

喬木村で住宅造成の計画が立てられ、528-1番地と547-1番地が取得された。平成22年3月に喬木村教育委員会によって528番地で試掘調査が行われた。表土下50cm辺りから中世陶器片・灰釉陶器片・古墳時代の土器片が多く出土したので、県教委生涯学習課の指導により、最低、道路用地内の発掘調査が指示された。そこで、今村に調査担当者の依頼があり、必要に応じて拡幅調査実施と測量は業者委託を条件にして発掘調査実施が決まっている。

5月6日から重機による表土排除を進め、5月10日から発掘調査を開始している。調査地は南側をA地区、北側をB地区にして、作業分担をA・B地区担当を決めている。5月6日の表土排除作業で気付いたことは、A地区では表土下50cm辺りで阿島式壺形土器の大きな破片が出土し、大形な打製石斧が出土し、阿島式土器の包含層は予想以上に浅いことであった。結果で報告されているように、小高い所から特殊な遺構群が検出された。

5月の内はA地区では溝状遺構や集石遺構が高いところにありそうで、下層の地層を確認するための一部掘り下げを行い、下層に礫層を見つけた。松島信幸氏の検証により下層の地山と判断されたので、阿島式土器に伴う遺構確認の調査に重点を置くことが出来た。B地区は予想通り包含層は深く、平安時代・古墳時代の遺物包含層が幅狭るので、掘り下げに手間取っている。

6月には、A地区では弥生時代後期の土器棺の検出を始め、阿島式土器を伴う溝状遺構や集石遺構の検索に専念できたが、B地区では平安時代・古墳時代の遺物出土が重なり、砂礫の多い窪地地形の確認に手間取り、阿島式土器を伴う遺構の所在を知ることが出来たのは7月であった。現地説明会の行われた7月10日にはA地区では高台に立地する溝状遺構や集石遺構の見学が出来たが、B地区では平安時代・古墳時代の住居址の説明に留まっている。7月16日から阿島式土器を伴う竪穴9の検出に入り、なお同様に阿島式土器片の多い竪穴11の本格的な掘り下げが行われたのは7月23日で、東側への拡幅調査が出来かねる時期でもあった。

この年は雨天の多い年でもあり、深いところに溜まる雨水に悩まされ、最後の詰めの調査が不十分

の状態で、7月30日に実働調査日数53日の発掘調査を終了している。輻輳する包含層、1.6m以上下層の造構確認の困難さを知らされた調査であった。

その後、9月から整理作業に入った。収拾された阿島式土器は半完形土器を含めて1763点以上、朱彩土器も120点以上あり、三河系の櫛描文を持つ壺形土器の発見もあるので、阿島式土器半完形・弥生時代土器棺と石器の実測は㈲M2クリエーション松澤氏に委託し、拓本図版を多くして、調査報告書を編集している。

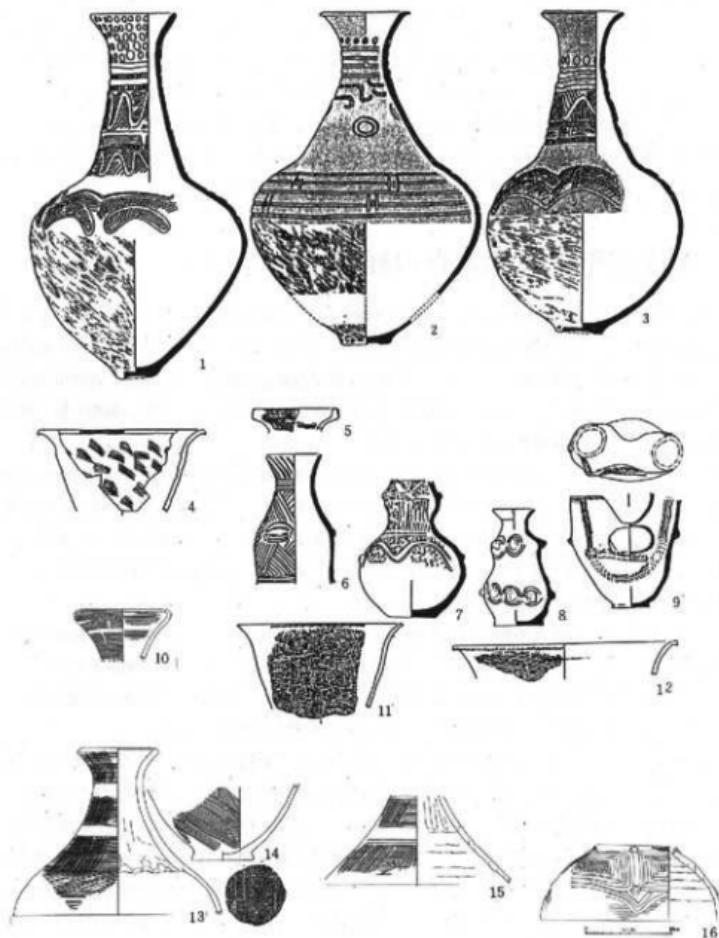


図1 五反田遺跡出土の阿島式土器

## II 五反田遺跡周辺の環境

### 1. 阿島式土器時代の自然環境 –とくに地形発達を中心に

松 島 信 幸

#### (1) 喬木村における調査地点の位置

阿島式土器が出土する地点は、村の北部、加々須川右岸、天龍川に面する最低位の段丘面上にあたる（第1図）。県道伊那生田飯田線（標高418.7m）より天龍川へ向かって60m入った地点（標高417m）である。最低位の段丘面は、調査地点から天龍川へ向かって、さらに180m連続している。段丘面の末端は、比高2m～3m余の段丘崖が、天龍川に並行するように形成されている。段丘崖下は天龍川の洪水氾濫原で天龍川に向かって200m以上先まで広がっている。

#### (2) 発掘調査地点周辺での地形発達

##### ①地質観察

調査地点での阿島式土器を包含する地層は、表層の耕作土直下（深さ数10cm付近）に遺物が散在している。疊混じりの砂層を主とし、人的な擾乱や表層流による攪乱を受けている。堆積環境や遺物を包含する産状が亂れている。次回の発掘調査で、詳細な観察を待ちたい。

##### ②低位段丘面を覆う土井場層状地（第2図参照）

調査地点の低位段丘の表層を覆う砂礫層は、土井場沢による扇状地性堆積物である。今回の調査では、段丘礫層の実体を確認するためのトレンチ調査をしなかったので表層部分の観察しかできなかつた。阿島式土器時代から現在までの間、低位段丘面の背後にある城原段丘を掘り込んだ土井場沢からの土石流氾濫が段丘面上を覆っている。阿島式土器は、こうした砂礫層中に包含されている。詳細は今後の調査を期待したい。

##### ③低位段丘面を掘り込む加々須川

調査地点から南へ600mの位置に加々須川が流れている。加々須川は、低位段丘面を4m～4.5mほど掘り込んでいる。現在の加々須川は、両岸をコンクリート堤で固められている。加々須川に面して、巾50m前後の斜面が護岸堤まで延びている。斜面の比高は、2m～2.5mである。斜面には、家々が建ち並び、加々須川によって低位段丘面が侵食された部分にあたる。この部分での2m余の掘り込みは、阿島式土器時代以降、加々須川による低位段丘面の侵食と考えられる。

##### ④洪水氾濫面で天井川になる加々須川

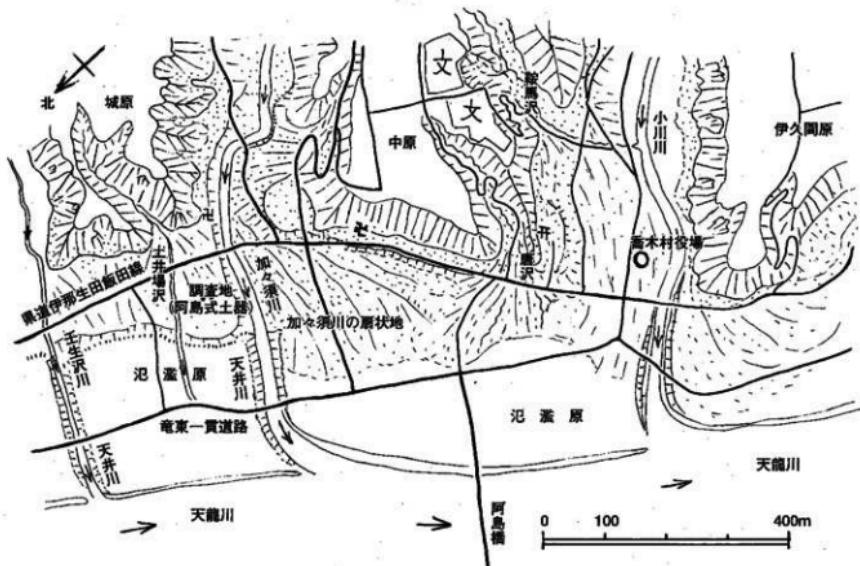
加々須川は、最低位段丘面の下流端より天龍川までの間が天井川になっている。竜東一貫道路を走って加々須川を渡るとき、水田地帯から約5mの上がり下がりをする事で天井川が実感できる。壬

生沢川を越えるときにも同様である。低位段丘面の下は、天龍川の洪水氾濫原である。その氾濫面へ、加々須川から供給される砂礫が堆積を繰り返してできてきたのが天井川である。天井川の形成は、低位段丘面を掘り下げてきた過程で形成されたといえる。

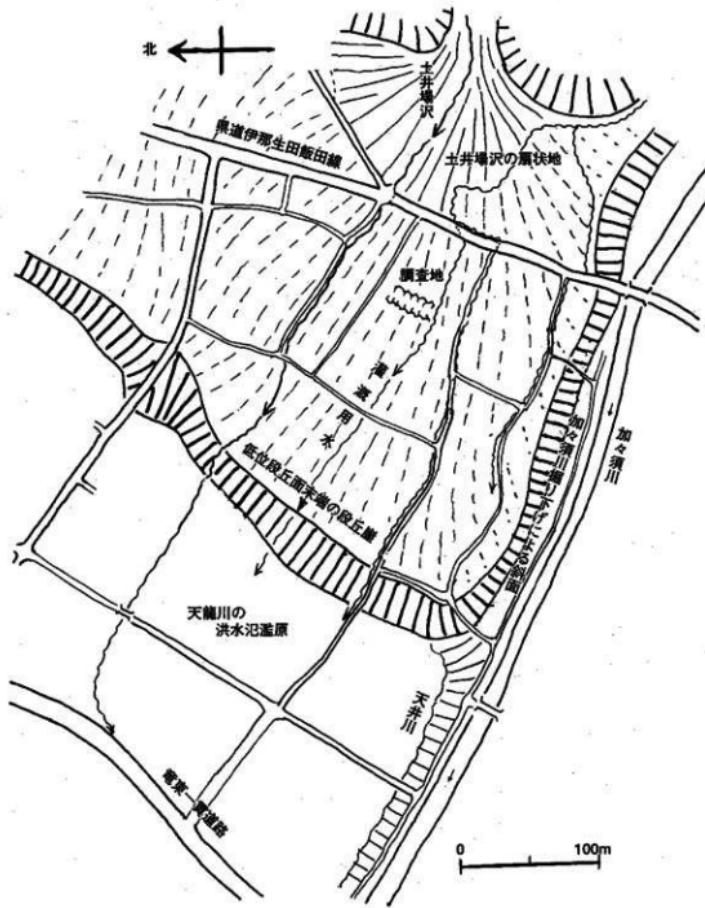
#### ⑤天井川を築いてきた稲作人

天井川の形成には、低位段丘面上で生活していた弥生末の人達から現在に至る稲作農民に関係する。天井川は、天龍川洪水氾濫原で水田耕作をしてきた人達が營々と築き上げてきたもの、人とのかかわりが極めて大きいといえよう。阿島式土器の年代は、約2千年前で、西歴元年前後とされている。堅固な護岸堤で固められている現在の姿は、新しい時代の産物であり、50年前の「三六灾害」後の復興による。さらに以前は、加々須川で発生する度々の洪水で破堤して砂礫が水田地帯へ流れ出る。破堤すれば、その都度、人力をもって氾濫した砂礫を天井川へ積み上げてきた。こうした結果が、天井川の姿である。

今回の埋蔵文化財緊急発掘調査からの成果として、2千におよぶ稲作民が、加々須川の氾濫を逆手に取って築き上げた天井川という遺産を見直すきっかけが得られた。広く当地域の地形発達史を構築するまでの成果といえる。



第1図 高木村中心部の地形分類図と調査地の位置・印



第2図 調査地周辺の地形分類図

## 2. 五反田井

(昭和42年慣行水利権届出書から)

### 〈沿革・現況〉

五反田井は、加々須川を源のぼり寺の前集落の上流、同川に架かる「お滝場橋」付近の右岸から取水し、寺の前地区から安養寺の裏を通り明神社の参道付近に至り、ここから幾筋かに分かれ五反田、蒔坪の一部に及ぶ長大な井水である。

井水開削の歴史は古く昭和42年の慣行水利権届出書によると、推定480年前とされているから今日からすると500年以上前に溯源することになる。対岸には御用水の取水口が、さらに上流には帰牛原井が取水をしているが渇水時の取水優先権は一番井と云われた五反田井にあり、御用水は旧藩主(知久氏)の裁許状、帰牛原井は協定書が取り交わされておりこれに基づき取水量を決めてきたようである。現在の取水口は、太郎井という寺の前地区を灌漑する井水の取り入れ口を使用しており、このため五反田井は本来の五反田、蒔坪に加え寺の前の灌漑も担っている。前出の慣行水利権届出書によれば灌漑面積は、10haであり寺の前、五反田、蒔坪の一部が灌漑区域となっている。取水については、稻作目的のほか防火用水や養魚のため通年取水が認められている。

加々須川は寺の前から加々須へかけて大変急流であり「瀬戸の滝」と言われる名所を有する峡谷をしており浸食も激しいため取水には大変苦労してきた。災害のたびに流されたり河床の低下による自然取水が困難になるなどの事態もあったが努力や工夫、災害復旧による公費助成による堰上工事などが行われて今日に至っている。

### 〈取水口〉

第一五反田井取水口 天竜川水系 1級河川加々須川右岸 下伊那郡喬木村字大平4506番地先

第二五反田井取水口 天竜川水系 1級河川加々須川右岸 下伊那郡喬木村字寺の前4668番地先  
(現在施設なし、予備的取水口)

## 3. 阿島地籍の史跡・遺跡

慶長八年(1603)に知久則直が旧領に封ぜられて郭地籍に館が置かれた。この地域は阿島村・加々須村・小川村大島地区に分かれていた。知久氏の城下町として阿島は発展し、古くから居住していた人々により耕地が広がっている。

中世には城原に旧知久氏の神の峯城にかかる城郭が築かれ、桃添地籍に砦状の城郭があった。その城と地域の結びつきについては不詳なことが多いが、阿島地域に古集落が形成されていたと思われる。文献による「阿島」の呼び名は嘉慶四年(1329)の諏訪上社御頭役の折、伴野庄の内、里原・阿島の記録があると『喬木村史』に書かれている。律令時代からの伴野庄に含まれていた古い地域であることが判る。

平安時代の遺跡発見の少ない喬木村の中で、住居址が発見されたところは帰牛原の城本屋遺跡と伊

久間中原に留まっている。表面採集調査では五反田遺跡から須恵器・灰釉陶器片がよく拾え、今回の調査でも上層から灰釉陶器片が発見され、喬木村三番目の住居址や配石遺構が検出されている。郭・里原地籍でも灰釉陶器片が拾えるが現在の所量は多くない。上段地域では現在の所発見されていないが、豊丘村のように発見の可能性は高いと思われる。

古墳時代には、高塚古墳が喬木村では52基登録されている。その中で、阿島地域には21基ある。郭地籍にある「郭1号古墳」は竜東地域唯一の前方後円墳で、墳丘・石室が現存している。その周辺に5基の古墳群が形成されている。その下段に位置する町に2基、その南里原地域に5基存在する。とくに町古墳は最下位段丘上に位置している。古墳時代の集落は帰牛原中原遺跡で多くの住居址が確認されただけであったが、今回五反田遺跡でも住居址が2軒と溝状遺構が検出されている。底に敷石を持ち、焼土や炭の多い溝状遺構や周溝を持つ逆台形状の特殊遺構も検出され、ここにも大きな集落がありそうに思われる。そうなると、調査が進めば、町でも里原もこの時期の住居址は発見される一带と思われる。

弥生時代後期の住居址は帰牛原中原・城本屋・五反田遺跡に留まっているが、城原では完形土器が出土し、大島でも土器片が出土している。下段の扇状地北・町・里原一帯には集落の所在が予想されるが現在の所確認されていない。五反田遺跡でも昭和36年の試掘調査で住居址が発見され、今回土器棺や集石も検出されているので、集落の存在を推測することが出来る。弥生時代中期の阿島式土器は五反田遺跡に集中し、郭遺跡でも発見されている。とくに五反田遺跡では昭和初年から完形土器が発見されたり、昭和36年の試掘調査では住居址が確認されている。今回の調査によって阿島式土器片1700点以上収拾され、特殊な溝状遺構や竪穴状遺構に集中している。似通った地形は壬生沢川左岸の阿島北や加々須川左岸の町地籍からの出土も予想されるが、現在の所確認されていない。

繩文時代になると、阿島北・五反田・おくまんの・花立・里原・郭遺跡や、帰牛原の中原・城本屋・大久保・十万山など各地から遺物が採集されている。住居址が検出された所は、郭遺跡、帰牛原の中原・城本屋・十万山遺跡で、とくに城本屋では40軒以上の繩文時代中期の住居址が検出され、十万山では繩文時代晩期の土坑が検出されている。住居址の多くは繩文時代中期であるが、城本屋では後期・前期のものが含まれ、郭遺跡でも後期・前期の遺物が発見されている。とくに、郭地籍では北側の傾斜面から繩文時代前期の土器片が多く拾う事が出来た。

まとめてみると阿島地籍では上段地域の帰牛原一帯に住居址や遺物が広がり、伊久間原遺跡中原に次ぐ大遺跡である。下段では郭の台地と五反田遺跡である。五反田遺跡は繩文時代の遺物が表面で拾えるものの、遺構があるかどうか現在の所不詳である。前記のように各時代記述による弥生時代中期から後期、古墳時代・平安時代・中世に到る遺構が層的に検出される大きな遺跡である。反面、この五反田遺跡に隣接する阿島北・町・南にかけた扇状地では遺物が拾えるものの、里原下段の中世水田址検出のほかは発掘調査が行われていないので、未解明の地域が広がる。とくに、町地籍の下段で古墳が発見されながら調査の手が入っていない。五反田遺跡の小段丘下方から、北側の北地籍、南側の町地籍の低地一帯は集落や水田址所在の可能性が高いと思われる所以、調査をして欲しいところである。とくに、下段を走行する竜東バイパス道路については、北の豊丘村地籍を含めて試掘調査も行われていない。阿島式土器の出土範囲を含めて調査の手を広げて欲しい地域である。



図2 阿島地籍の埋蔵文化財包蔵地図

## 喬木村



図3 五反田遺跡の調査区

表1 喬木村埋蔵文化財包藏地一覧

No.	遺跡名	所在地	縄文時代		弥生時代		古墳時代		平安時代		中世	近世	調査年度、遺構・遺物、備考
			石器	土器	草	早	中	後	鐵	金			
1	阿島北遺跡	阿島 北			○	○	○	○	○	○			遺跡の中心地不詳、詳細分布調査必要
2	土井場*	* *					○						久保田宅のこと?
3	阿島五反田	* *			○		●	●	○	○		○	昭和35年、阿島式土器・炉址、平成22年発掘
4	おくまんの	* *			○	○			○				遺跡地不詳、一確認必要
5	城原城跡	* 城原										○	棺の軸、塙尻
6	花立 遺跡	* 町			○	○	○	○	○	○			遺跡地不詳
7	阿島南*	* 南					○	○	○	○			遺跡範囲不詳、分布調査必要
8	朝原*	* 朝原			○	○	○		○	○		○	昭53年水田跡、下段の施雨再調査必要
9	城原*	* 城原			○		○					○	昭50年島地公園調査
10	藤原*	* *			○								
11	郭*	* 郭			○	●	●	○	●	○			● 昭52年調査、平成3年調査、縄文中期住7・河内 周辺7等
12	知久氏領跡	* *											● 板坂、池路、茶室跡月庵
13	西の宮遺跡	* *			○				○	●		○	
14	御牛原*	* 御牛原			●	○	○	●					昭45年調査、縄文中・方形周溝墓 昭52年御牛山、平成8年運動公園整理 昭851調査、鰐中住45・調後住3・弥生住2・平安 住1・中世住1
15	城本屋*	* 城本屋			●	●	●			○	○	○	昭45年調査、縄文時代住15・弥生時代後期住・方 形周溝墓4・中島式大形埴輪1個 昭47年調査縄文後期住1 方形周溝墓
16	鶴牛原寺里*	* 中原			●	○		○					
17	* 南原*	* 南原			○		○						
18	大久保*	* 大久保			○		○						大型周溝
19	寺の前*	寺の前			○								遺物出土地不詳
20	馬場平*	小川馬場平			●	○	○	●	○		○		旧中学校敷地弥生時代住
21	西平畠中*	* 南平					○						詳細調査疑問
22	田本平*	* 田本平			○		○						風塚上、弥生時代後期妻形土器
23	上耕地*	上耕地			○		○						遺物出土地不詳
24	小川田舎	* 田舎			○			○	○			○	小川の南北耳栓、平畠弥生竪形土器完形・古鏡
25	さぎのす頃*	* *			○								医象寺付近
26	小川的道遺跡	* 上平			●		○						● ○ 縄文中期住・松下城跡下中世周溝
27	* 上平*	* *			○	○	○					○	平成2年調査、縄文中期住3・弥生後期住4・方形 周溝墓1・中世建物址2・配石遺構!
28	さがり空跡*	* *											○ ● 昭和56年調査、道路沿いに4基の窓が並ぶ。(小川 付)
29	小川上の原*	* 上の原			○	○	○						遺物出土地不詳
30	松下城跡	* *											土器・二面・空甕・土壺・堅甕・堅土器
31	跳原十三塚	* *										○	平成4年調査、10基の内4基破壊、5~10号墳丘 現存
32	ショウバ塚	桃源				○							遺物出土地不詳
33	茶臼山遺跡	*				○							
34	桑の木平*	大島					○						堅甕石器出土
35	中反*	氏秉中反				○							石器出土
36	氏秉城跡	* 城山											主葬・二郭・土壘等
37	小川川反遺跡	伊久間小川川				○							表掲資料、位置不詳
38	寺下*	伊久間											衣冠不裏、平安坏出土(遺跡名假称)
39	マトバ*	* マトバ			○		○						
40	伊久間原*	* 伊久間原	○		●	●	●	○	○	○	○	○	昭27~29・52・53年7~10~11月発、縄文早期在8・中期在70 ・弥生時代後期住5・古墳時代後期20・平安時代住2・佛教建築 昭53、平2~8・11月調査、縄文早期住5・河内前住15・ 河内中前住15・阿傳前住6・弥生時代後期5ほか
41	伊久間下原	* *			●	○	●	○	●	○			

No.	遺跡名	所在地	形 態	縄文時代 中・後	古墳時代 前・中	古墳時代 後・土・須・石	平安時代 金・銀・銅	中世	近世	調査年度、遺構・遺物、備考
42	伊久間大原 遺跡	伊久間大原	○ ●							昭和53年調査縄文早期・中世住居址
43	伊久間城跡	伊久間原								後丘先塚、郭、上塚、腰曲輪
44	伊久間水島土塁	■								近世水防土堤。(一部城跡土塁?)
45	小平 遺跡	富田	○	○○○○						
46	馬場平 ■	■	○	○○						
47	地の神 ■	■	●	●○○	○○○○					昭和55年調査。縄文中層住5・弥生後期住9・古墳時代住3・平安時代住2・中世住1、建物址1
48	富田城跡 ■ ナマズ	■		○ ○ ○ ○			●			近世陶器・漆具多量出土、発掘跡不詳
49	第二小学校 案内	■	○	○ ○ ○ ○						
50	下原 遺跡	■	○ ○ ○	○ ○ ○						
51	市場 ■	■	○	○ ○ ○						
52	塙田 ■	■	○	○						
53	日向 ■	■	○							
54	上富田 ■	■	○							
55	富田 城跡	■					○	主郭以外不詳		
56	広町 遺跡	大和她	○							打石跡出土
57	元羅敷 ■	■	○							*

## 喬木村阿島地区古墳一覧

No.	村番号	登録番号	古墳名	所在地	立 地	墳丘現存	石室現存	遺 構・遺 物	備 考
1	102		町 古道	阿島町	低位丘陵	円・雄威	大石見跡	須恵器	昭和42年新見見
2	8	3390	町弁天 ■	町 花立1009	低位丘陵下	円・	*	土師器・須恵器	
3	9	3391	杉 立 ■	南 杉立1835	*	円・○		不詳	石造物あり
4	16	3386	宮 池 ■	北 宮池3907	中腹	円・○			
5	17	3385	熊 野 ■	熊野3921	*	円・○	直刀1・土解器・須恵器		
6	22	3364	城原 1号 ■	城原4241	中位丘陵	円・雄威	直刀・槍先・土師器		
7	21		城原 2号 ■	■ 3907	*	円・○	直刀1・土解器	昭和45年発掘調査	
8	23	3368	源 1号 ■	阿島源 3258	低位丘陵	東方側円・○	横穴石室	出土遺物不詳	東京港区第一砲台後円墳
9	24	3369	* 2号 *	*	3258	*	円・雄威	柾象・円筒埴輪・直刀・刀子・金鏡・板鏡・鏡・鏡盒・鏡具・當時・香莢・土師器	田学校校庭西隅
10	30	3370	* 3号 *	*	3601-1	*	円・○		
11	31	3371	* 4号 *	*	3611	*	円・雄威		
12	103		* 5号 *	*	*	中位丘陵中腹	円・雄威	側面無円筒埴輪・円筒埴輪・須恵器	村道改修中見見
13	35	3387	中原 1号 ■	細牛原中原3144	中位後丘先端	円・雄威		直刀・須恵器	
14	36	3388	* 2号 *	*	3148	*	円・○	円筒埴輪・直刀・刀子・須恵器	別名蘿塚
15	40	3377	大久保1号 ■	大久保2953	低位段丘	円・雄威		須恵器	
16	41	3378	* 2号 *	*	2953	*	円・雄威		
17	37	3389	孤 塚 ■	志原1679-4	*	円・雄威			
18	10	3381	重 原 1号 ■	阿島里原1226	低位段丘	円・	横穴	彷彿四神四獸鏡・直刀・鏡石・管玉・トンボ玉・須恵器	
19	11	3382	* 2号 *	*	1226	*	円・○		
20	12	3383	* 3号 *	*	1469-1	*	円・雄威	円筒埴輪・直刀	
21	13	3384	* 4号 *	*	1469-1	*	円・雄威	形象埴輪・土師器・須恵器	

### III 調査の結果

#### 1. 調査区と調査方法

昭和10年に発見された阿島式命名の土器出土地の久保田宅をI地点、昭和24年に確認された瓢箪形・双口土器出土の大平宅をII地点、昭和36年の試掘調査地(591番地)をIII調査区とし、今回の調査地をIV調査区とした。IV調査区は五反田第一工区の道路予定地で、南側の547番地地籍をA地区、北側の528番地の道路予定地をB地区に分けた。周囲の土地状況からA・B地区とも3m幅のトレーンチを設定し、重機により表土を40cmほど排土して、層別に掘り下げるにした。

ところが、A地区は予想外に包含層が浅く、上層から阿島式土器が出土したので、遺構の存在確認の作業に入っている。B地区は予想通り包含層が深く、上層から平安時代の遺構、古墳時代の土器出土が多かったので、層別に遺物確認をしながら調査を進めている。

#### 2. 調査結果の概要

検出された遺構は、表2のように、弥生時代中期(阿島式土器)では、溝状遺構1・2・4、竪穴状遺構9・11、集石遺構(10基ほど)、弥生時代後期では、中島式壺形土器と壺形土器が合わされた土器棺と土器集中地、古墳時代では竪穴住居址3軒・周溝状遺構1・土坑5で、平安時代では4号住居址と土器集中地・配石遺構で、特異なものとしては近世以降の「旧五反田井」が検出されている。A地区とB地区では、遺構の立地状況・遺構の種別が大きく違っている。とくに阿島式土器を伴う時期をみると包含層の深さが大きく異なる。A地区は表土下60cmから、B地区は1m60cmほどの深さがある。遺構別にみると、A地区では溝状遺構とそれに伴う土器の集中箇所・集石等が主体で、小高い所にある一連の遺構群でそのあり方に課題が残されている。B地区では、上層に炭の堆積を持つ竪穴状遺構9・11が検出されている。柱穴等の検出は無かったものの、土器片が集中する。とくに竪穴11では約半分の検出でありながら、500点を越える土器片が集中していた。竪穴の下部には落ち込みがありそうにもみえたが、掘り下げてない。I・II地点、III調査区との位置関係からみると遺跡範囲は広く、集落の広がり・集落の中の遺構種類等々を探る為の特異な遺構発見と思われる。後述されるように、A地区的溝状遺構No.25を中心にして、三河系の櫛描文施文の土器群が出土し、この系統の土器がほかでも散見される。重要な発見と思われる所以、昭和初年発見の土器を含めて紹介しておきたい。

図1の土器群は昭和初年以降に出土した代表的な「阿島式土器」である。1・2・3は昭和36年出土の長頸壺形土器、6は久保田宅出土の筒型土器、7~9は大平宅出土の瓢箪形土器・双口土器、10、13~16は今回出土の櫛描文の壺形土器群である。このうち2は喬木村歴史民俗資料館に展示され、その他以前の出土土器は、下伊那教育会教育参考館に保管されている。

表2 遺構一覧

	A 南	A 北	中間 地帯	B 南	B 北
弥生時代中期	溝状遺構4	溝状遺構1・2	集石遺構	竪穴 8	竪穴 11
弥生時代後期			土器棺・集中		
古 墳 時 代	溝状遺構3	6号住居址	5号住居址	周溝遺構	
平 安 時 代				4号住居址	配石遺構
近 世 以 降			旧五反田井		

表3 出土した阿島式土器の数

阿島式土器片（含半完形）出土数					
A 地 区			B 地 区		
遺 構 別	計	朱彩	遺 構 別	計	朱彩
溝 4 付 近	98	10	竪穴 9 周辺	257	25
溝 2 付 近	498	24	砂 積 地	66	9
溝 1 付 近	194	7	竪 11 周 辺	527	35
そ の 他	51	2	そ の 他	71	8
合 計	842	43	合 計	921	77
総 数			1763		

### 3. 検出された遺構・遺物

#### (1) 弥生時代中期（主として阿島式土器を伴う）遺構と遺物

##### 『A地区』

###### ① 溝状遺構土器集中地（図4～15）

図4にみられるようにA地区の長さ15mほどの範囲から検出された遺構は、溝状遺構4・集石遺構8以上・弥生時代後期の合わせ土器棺・古墳時代の住居址等である。弥生時代中期の溝1・2にかかる土器片集中か所は、No.10・11・12・15・16・17・25・26・29で、とくにNo.10・16・25は特徴的な場所であった。溝1と溝2の中間はA・B地区全体で最も高い位置にあり、地山と思われる礫群を挟んで遺構群が集中することになる。南側にも溝状遺構3・4がある。溝3は方向を異にした古墳時代の溝である。溝4は溝1・2と同方向で、その南側に集石1・2・3が並んでいる。主体になるのは、溝状遺構1・2で並行していることは分かるが、東側・西側で双方繋がるのかどうか不詳である。

###### ア 溝状遺構1（図4・5・14）

最も北側に位置し、幅やく1.5m、深さは西側で60cm、東側で80cmを測る。図中22の所の中腹に弥生時代後期中島式の壺形土器と甕形土器を合わせた土器棺が出土している。その下層一帯からは阿島式土器片の出土が多い。とくに集中するところは無いが、西側に多い傾向がある。図14-2は壺形土器片、22～37は甕形土器片で大形なものが多い。1・23は朱彩の口縁部、5・6は櫛描文系の土器片で、中央辺からも出土している。溝底は東側で深く落ち込んでいるように思われるが、用地外のために調査されていない。

北側の溝縁に集石遺構20・21が並び、それぞれ阿島式土器片が出土している。図には記載されていないが、21の東側に同様の集石遺構があった。弥生時代後期にかかるか中期にかかるかはっきりしないが、南側から検出された集石遺構1・2・3と共に、時期を決めかねる遺構群である。

溝の南側は中央の礫群に続く傾斜面で、土坑29が登録されている。東側は用地外に近く、6号住居址と重なるために、詳細調査が行われていない。

###### イ 溝状遺構2（図4・5・6・7・8・10・11）

溝状遺構1～4の内、最も幅広で深さを持つ溝である。最大幅1.5m、深い所では80cmほどある。この溝縁や溝中に石器や平石を伴う土器片の集中か所がある。登録されているものは、東側からNo.15・16・17・26・25・11・12で溝上にNo.10がある。代表的なものはNo.16とNo.25である。

No.16は東側の溝縁を抉るように掘り込まれ、大形打石斧・平石と土器が幾重にも固まっていた。図7の4・16、図10の土器が重なっていた。図7の4は、太い沈線で囲む文様の壺形土器肩部、図8の

3は無紋系の壺形土器半個体、図10・11は壺形土器・壺形土器片で、とくに壺形土器片は大形なものが多い。そのわけは、表土下60cm辺りで最も早く検出され、下層に幾重にも重なること、さらに左右へ広がることから、No.17と重複しているように思われる。石器の出土も多く、大形打石斧が3個出土している。横に広げる調査が行われず、土器の固まりをみながら掘り下げたので、結果的には東側のNo.15、西側のNo.17は一連のものであったかも知れない。

No.25は最も典型的な固まりで、上面に平石群があり、その間または下から図7・9の壺形土器が多く出土し、図8-2の壺形土器半個体が出土している。図7の1・2・3は土器群の下または西側から出土した細線交叉の櫛描文系壺形土器の口縁部・肩部である。1は口径9.5cm、胸部幅24cmの整った壺形土器である。胎土は薄黒がかりの黄色でやや硬質の土器である。細線交叉の櫛描文が鮮明で、三河系の所産土器かと思われる。しかも、胸部を欠いてはいるものの、器形を知ることの出来る貴重な土器と思われる。2・3の土器はNo.25の西側からNo.11・12にかけた一帯からの出土で、記録無しに取り上げられていることは口惜しいことではあるが、この一帯に多く出土している。似通った三河系と思われる土器片は、溝1の西側、B地区竪穴11からも小片ではあるが出土している。

以前の記録をみると、三河系の土器片は調査地Ⅲでも発見され、天龍村満島南遺跡や飯田市松尾寺所遺跡でも発見されて、話題になっている土器群である。今回出土の土器群は器形・文様構成の分かる貴重な土器であると思われるので、大きな成果の一つと思っている。三河の所産そのもかどうか今後確かめたい貴重な土器と思われる。

溝2の北側には礫群のある高いところがある。初めは集石群かと思ったが、小高い位置にある自然地形の礫群と思われる。この礫群の中に土器片が集中するのがNo.10である。ここは当初から土器片の出土が多くNo.10と登録されていた。掘り下げてみると、図8-1の壺形土器半個体が発見された。周囲を確かめてみたが、土坑状の落ち込みのほかは検出されていない。

また、No.16・No.25やその他の土器群周辺からは炭や焼土が発見されていないので微証資料に欠けることが多い。また、地形的に高いところであるということは、推測に留まっている。周囲の地形条件検証が整えればありがたいと思っている。

このNo.16・No.25は、溝2のあり方を象徴するような土器群で、この形態だけでは曰く付けすることは難しいが、集落の祀りの場・墓地的要素を持つ遺構群であるとも思われる。西への拡張調査も許されたが、わずかな範囲で糾明する可能性が少ないと想い断念した。将来的には西側で検証の調査が行われれば、課題が解決されるかも知れない。

#### ウ 溝状遺構4(図4・17)

南側に溝1・溝2と同方向の溝4が検出されている。当初は幾つかの黒土の入った所が続くと思われたが、西側の壁の土層調査中に溝状の落ち込みがあること、壁に沿って朱彩土器の集団があったので、溝状遺構として検出したものの、確信の持てない遺構の一つである。図17の1・2・3は朱彩の壺形土器の口縁で、後述するB地区竪穴9出土の口縁と同様なものである。

東側へ追ってみると溝状の形態になった。図4でみると溝幅1m・深さ60cmで、溝底に石が並ぶ。溝底は比較的平坦で、起伏が無く溝縁も整っていることから、溝状遺構とする条件に欠ける。また、溝状遺構であるならば、東側で古墳時代の溝3の下に潜ると思われるが、その形態を確かめるものが

なかった。場合に抛れば土坑群の並びであったかも知れない。

#### エ 集石遺構(図4)

集石遺構として登録したものは、南側の集石1・2・3、溝3の北側の集石7、溝2の南側の集石、北側の溝1縁添いの集石20・21で7基になる。検出当初は溝1と溝2の中間の石群も集石に登録したが、調査の過程で自然地形の礫群と扱っている。

遺物出土状態をみると、それぞれの集石から阿島式土器片が出土しているが、南側の集石1の石間から弥生時代後期座光寺原式の菱形土器の半個体が出土し、近くから弥生時代後期の小片が見付かっている。北側の溝1縁際の集石近くからは弥生時代後期の土器棺・西側の壁際から弥生時代後期中島式の土器が固まって出ていることから、場合によれば弥生時代後期の所産かも知れない。

集石状に整っているものは、南側の集石1・3、北側の集石20・21である。径20cmの平石6~7個を並べた所が並ぶ。掘り込んであるかどうか掘り下げてないから判らないが、深く掘り込んだ様子は見当たらない。

#### オ 下層の礫層

図4をみると溝2と溝3の中間に遺構のない所が梢円形に記録されている。ここはA地区の掘り下げが始まり、溝2のNo.16の石器や土器が高い位置から出た頃、5月30日に意図的に掘り下げたところである。この場所を選んだ理由は、西側上層に砂礫を含んだ新しい溝が2条あり、その溝が東側へ続いているのでその溝を掘り下げた。さらにその左右に遺物包含の無いところを選んで掘り下げた。表土下80cmほどの所に平坦な礫層が確認された。地山の層と判断して良いか松島信幸氏の現地確認をして貰い、地山と判断された。小高い地形の上に阿島式土器を伴う遺構の存在が予想されたので、勢い付いて両側の検出作業に入ることが出来た。掘り下げた部分には遺構と思われる黒褐色土や遺物出土が無かったが、ギリギリの所から落ち込みがあった。(写図9)

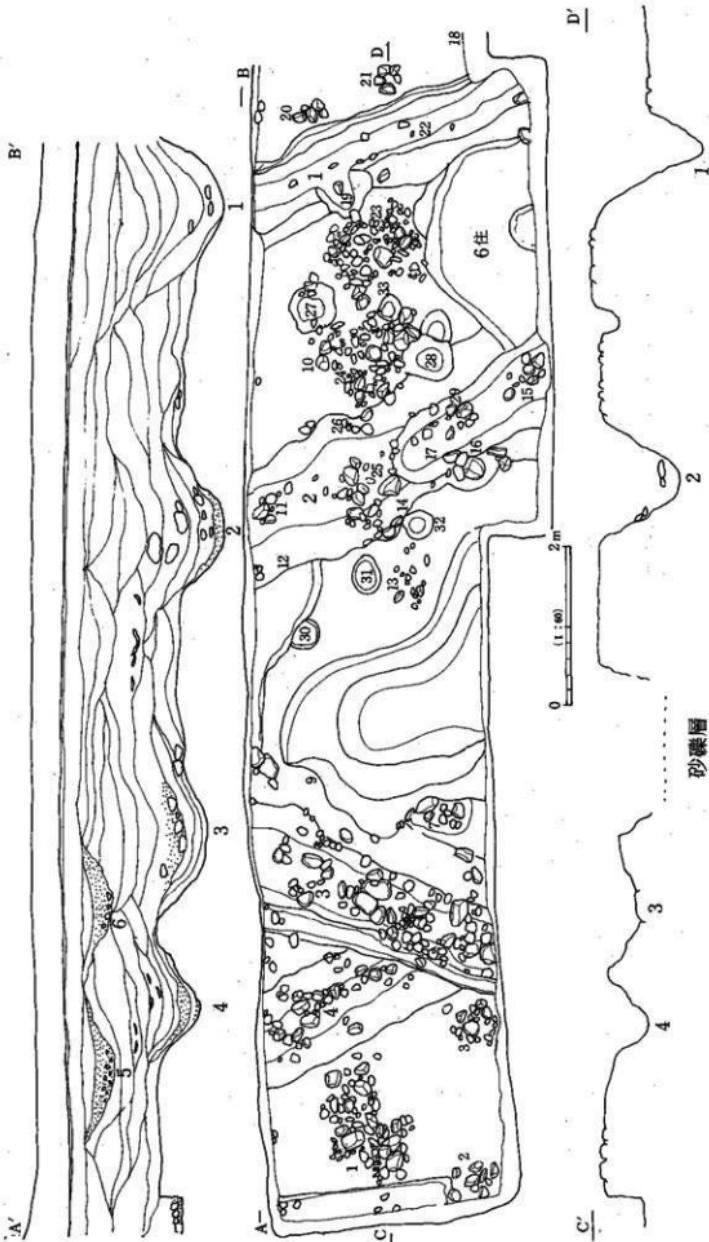


図4 A地区下層の造構全体図

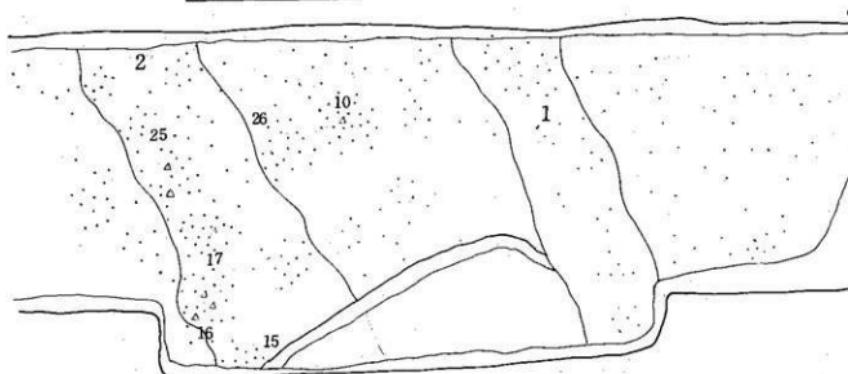
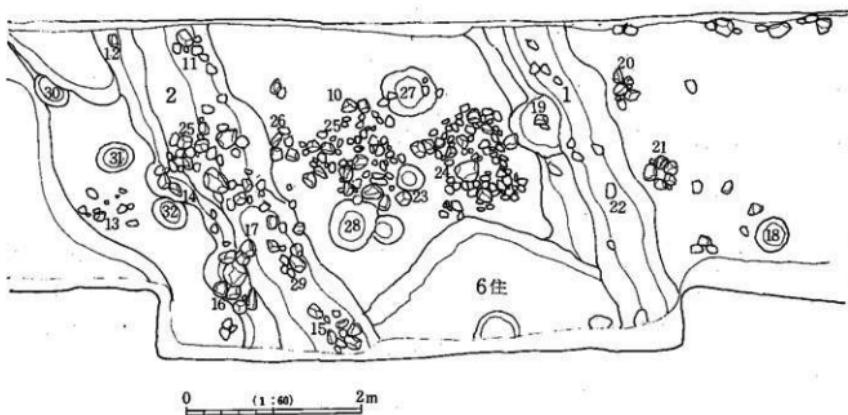
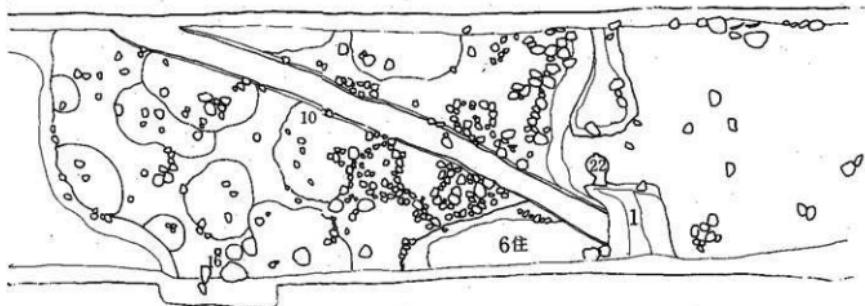


図5 A地区溝状遺構1・2周辺の遺構図

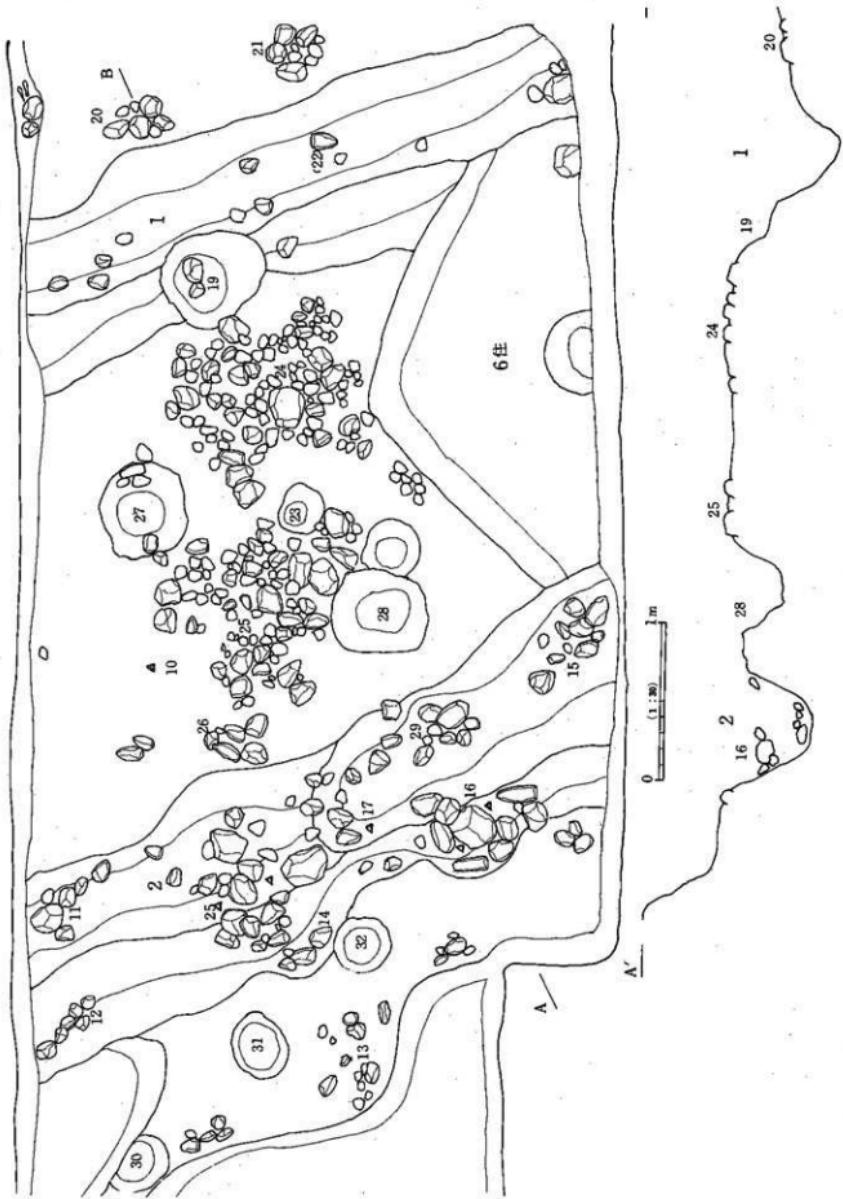
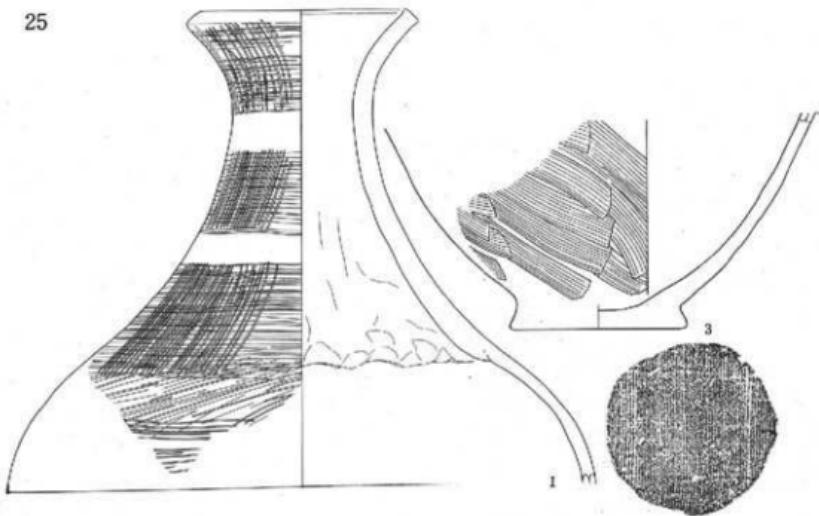
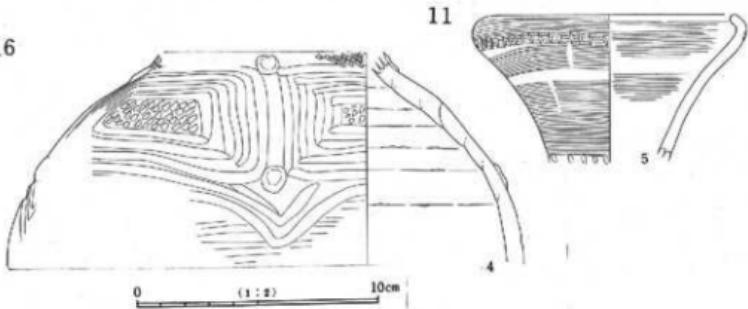


図6 A地区溝状造構1・2周辺の造構図

25



16



11

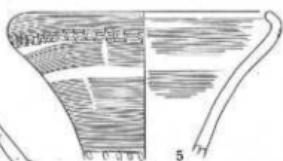


图 7 A 地区溝状遗構 2 出土壺形土器

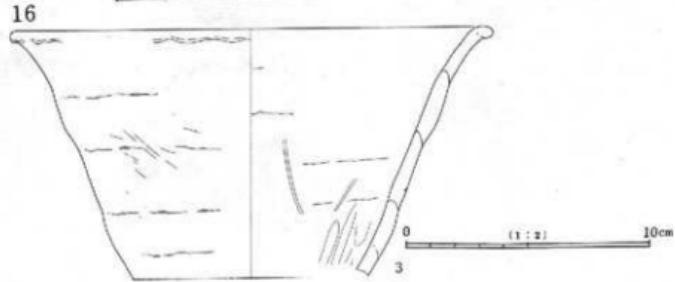
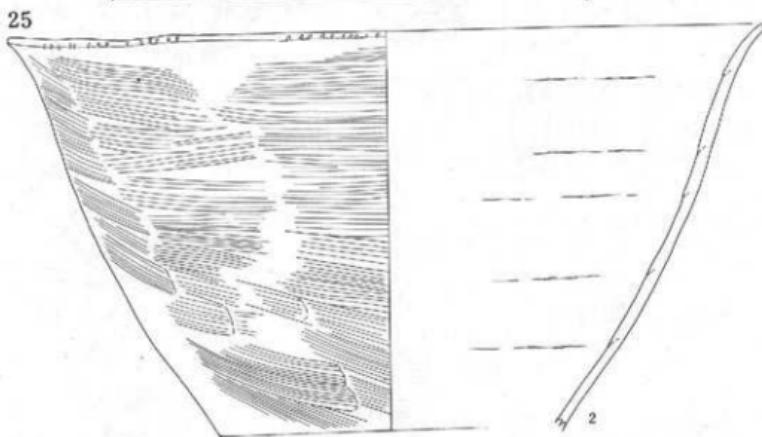
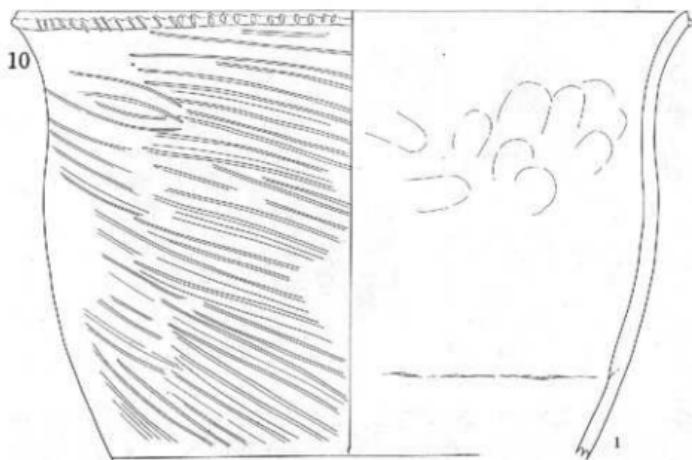


图 8 A 地区溝状造構 2 出土妻形土器

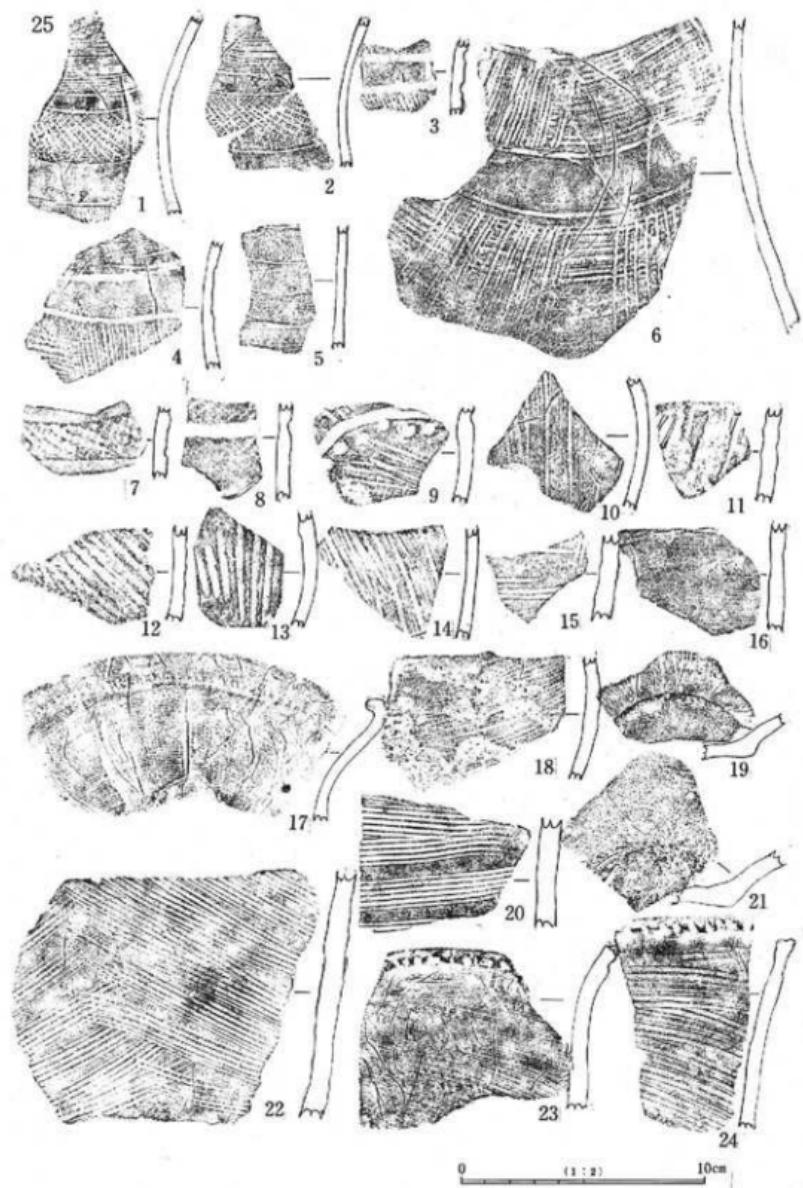


图9 A地区溝状遺構2 №25出土土器

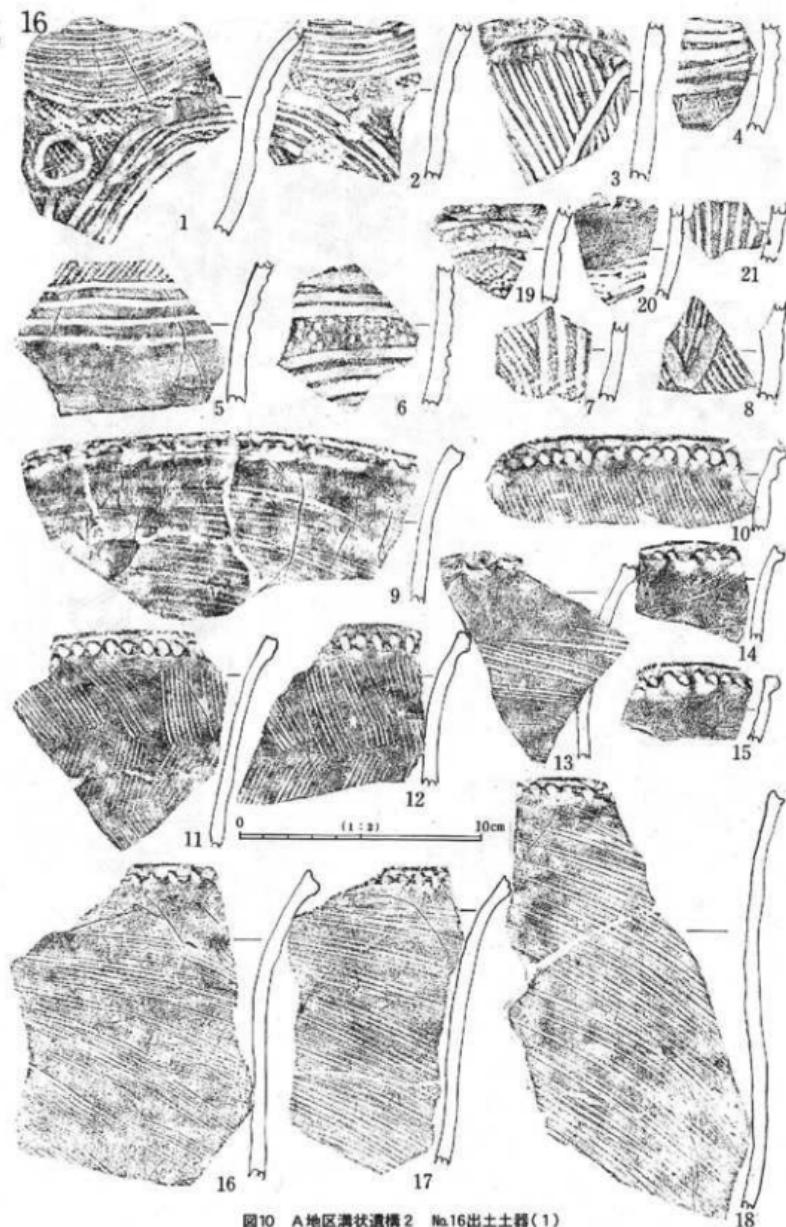


图10 A地区溝状遺構2 No.16出土土器(1)

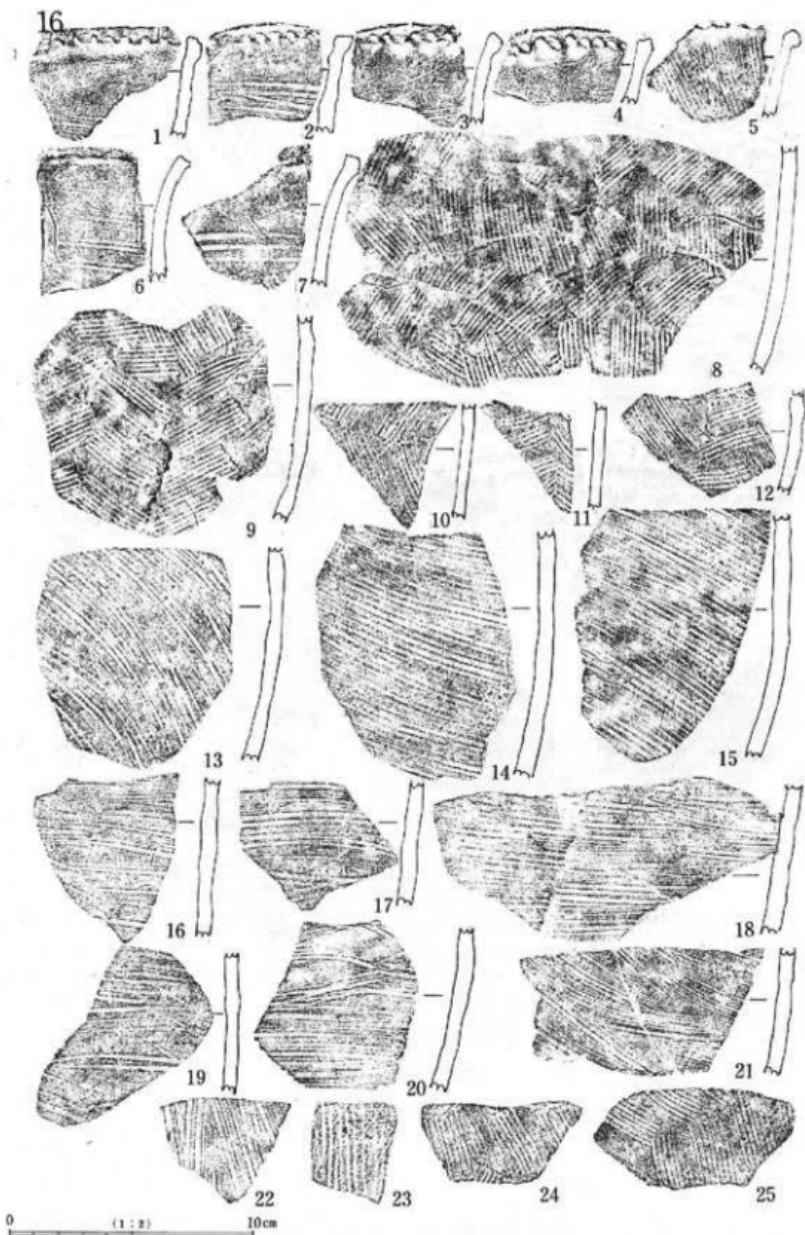


图11 A地区满状遗模 2 No.16出土土器(2)

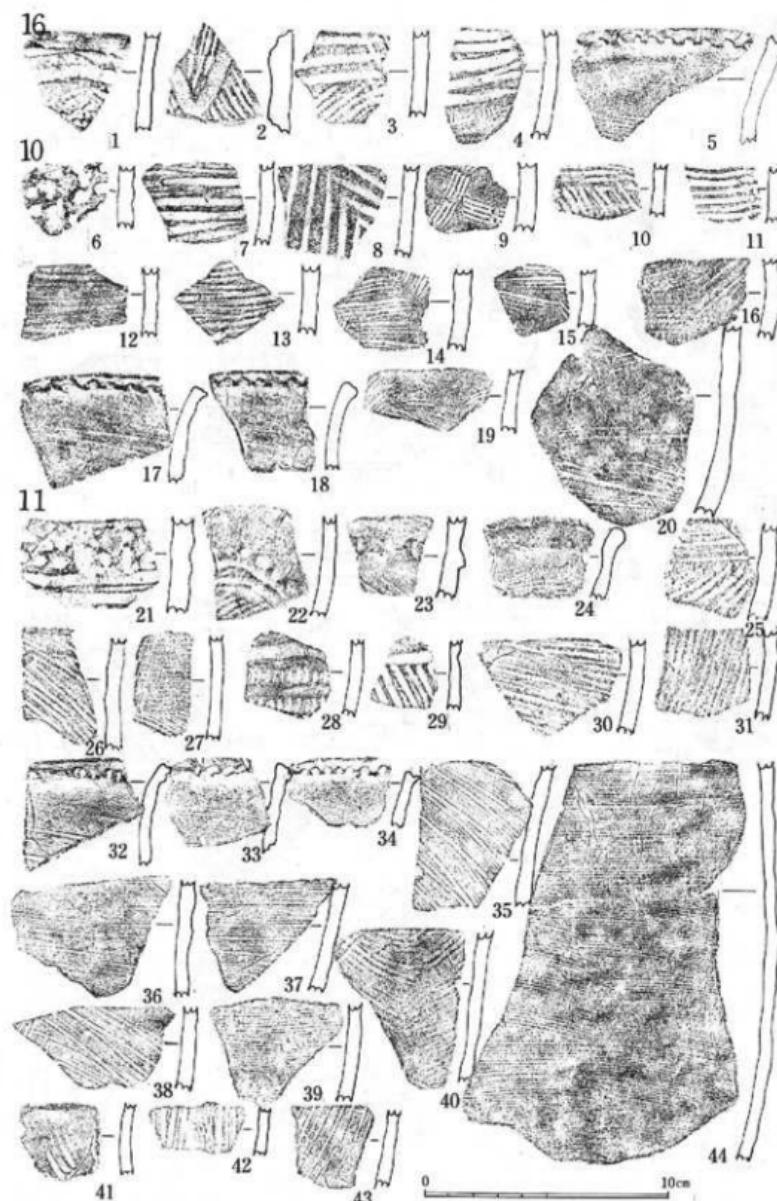


图12 A地区溝状遺構2 No.16・10・11出土土器

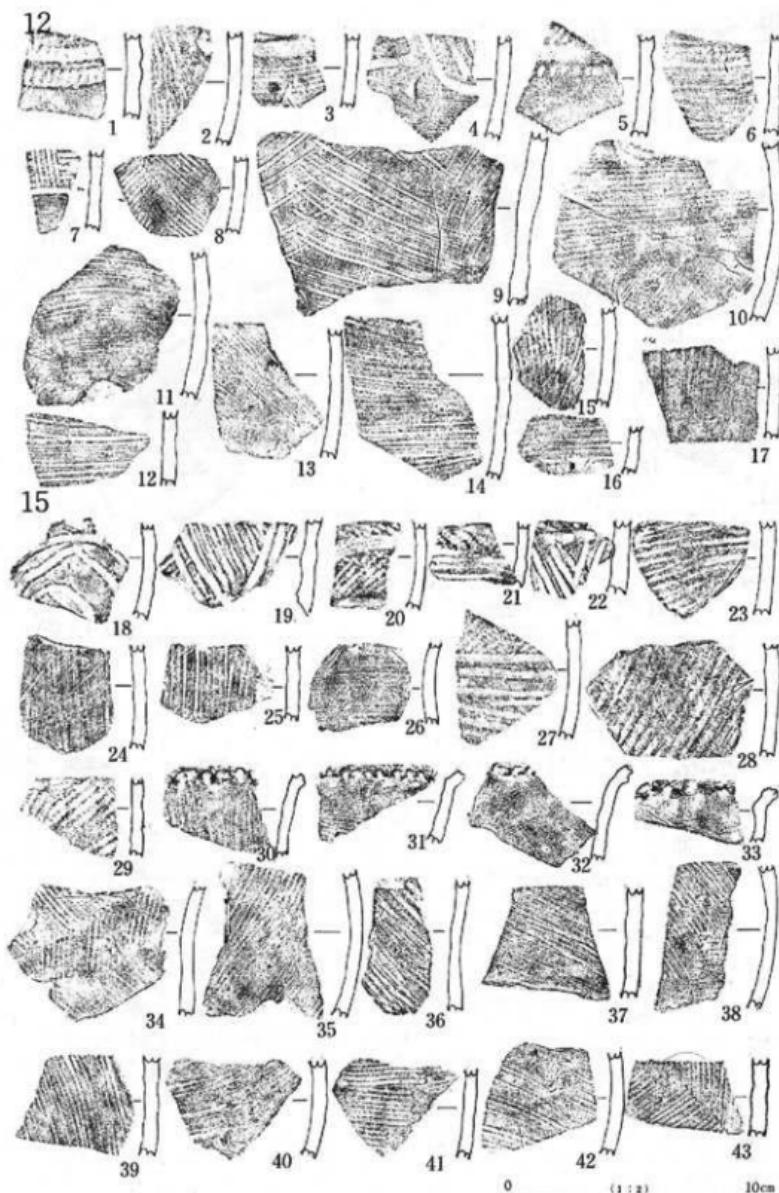


図13 A地区溝状造構2 No.12・15出土土器

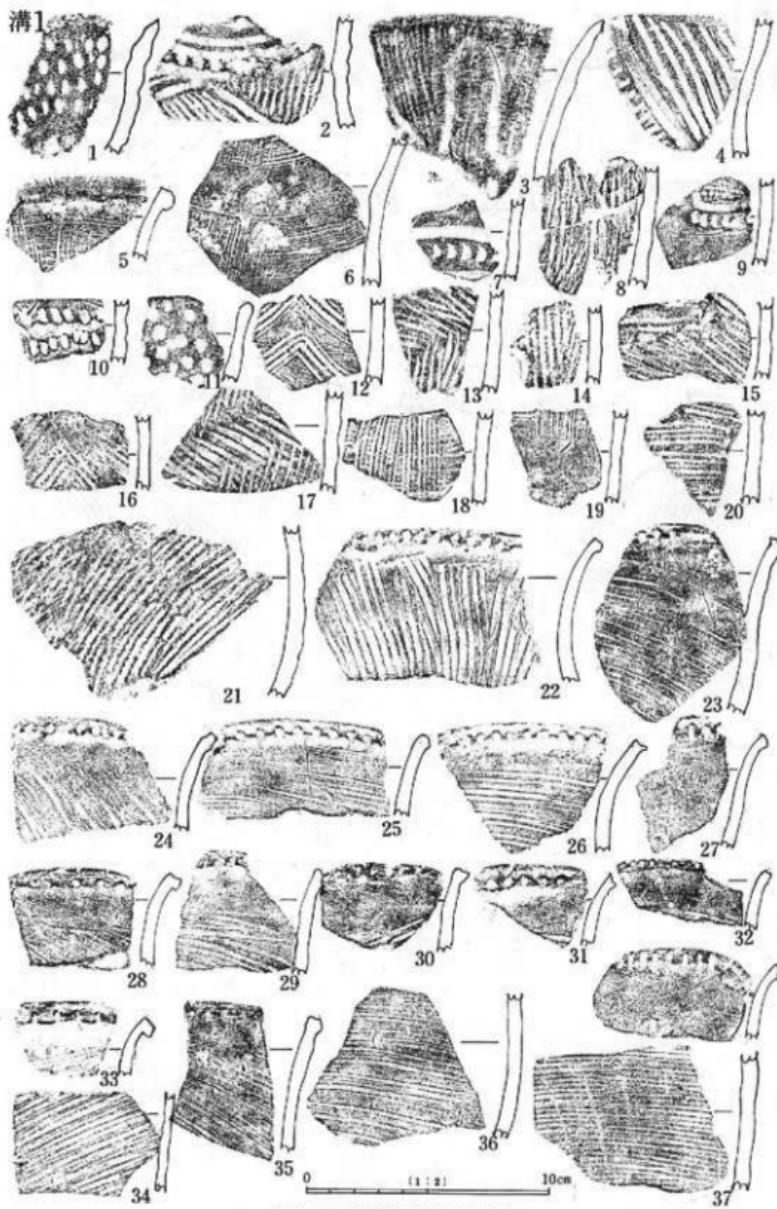


图14 A地区溝状遺構1出土土器

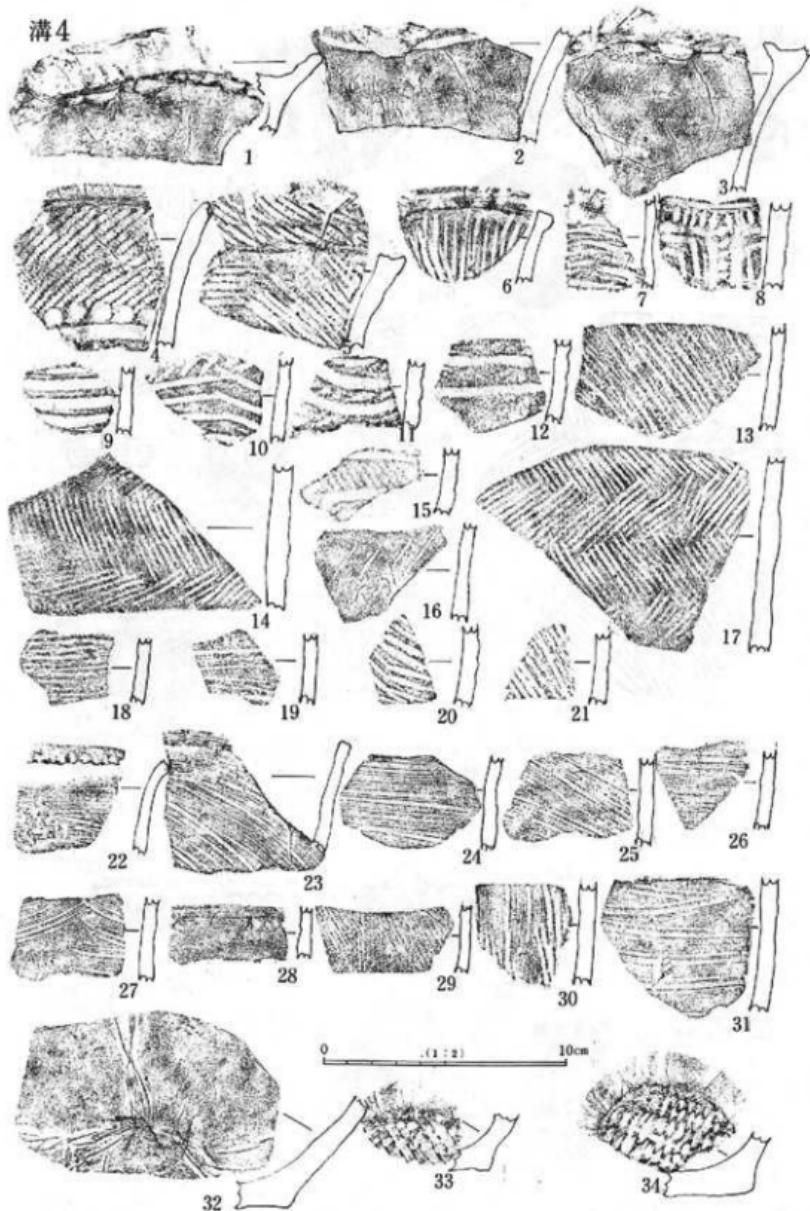


图15 A地区溝状遺構4出土土器

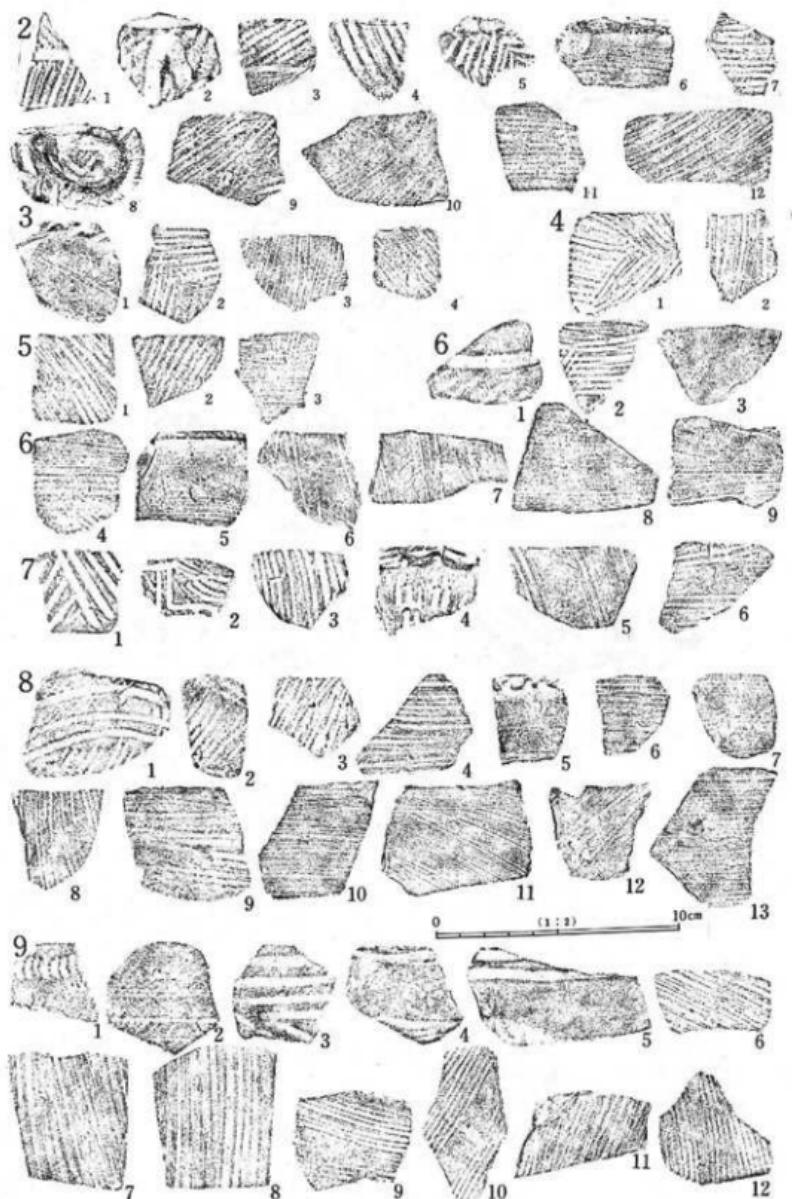


図16 A地区各グリッド出土土器

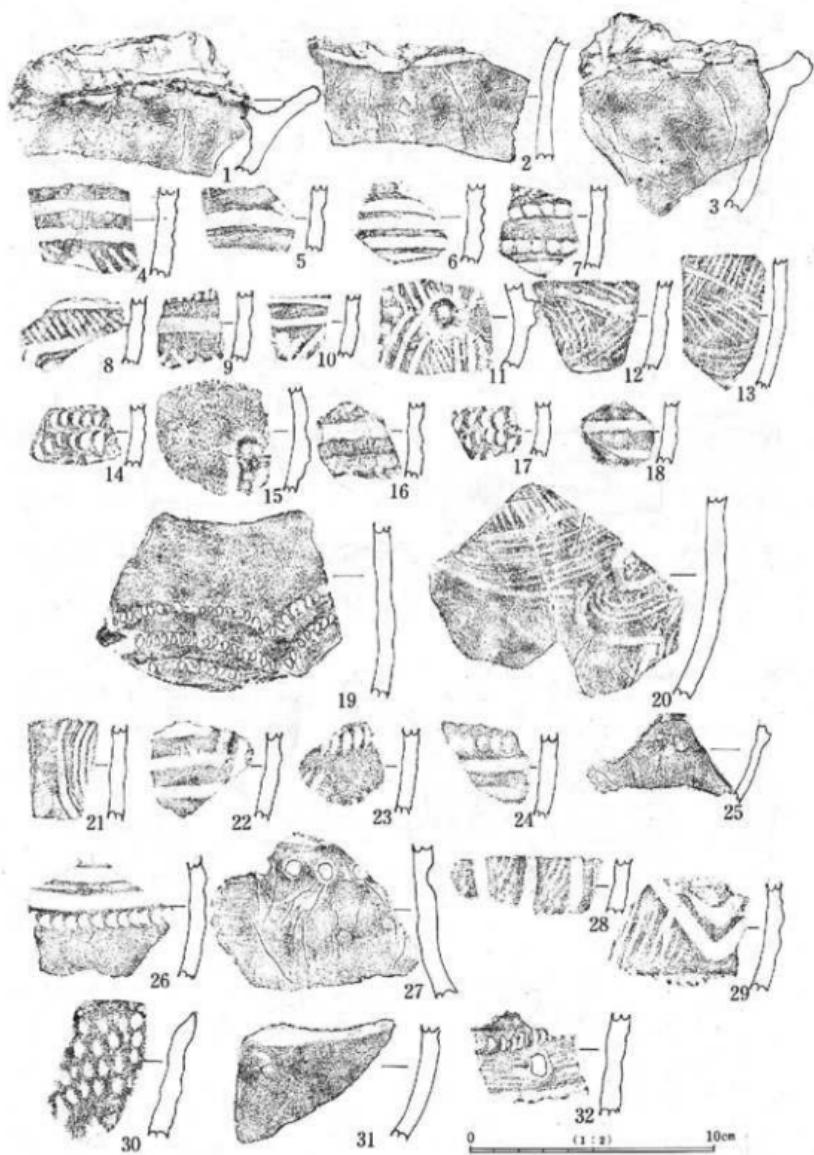


图17 A地区出土朱彩土器

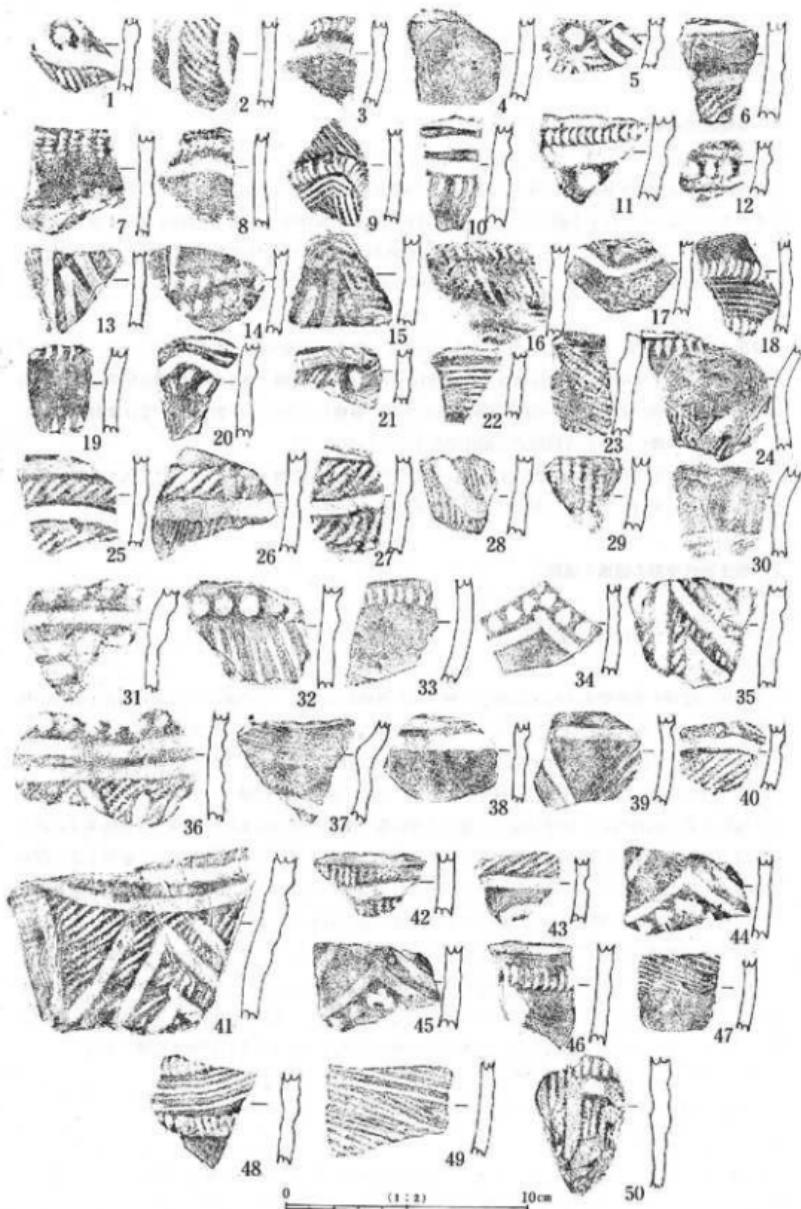


圖18 B 地區出土朱彩土器

## 『B 地区』

### ① B 地区の遺構と遺物

B 地区は五反田井を挟んで北側やく40m ほどの範囲で、A 地区より包含層は厚く、阿島式土器の集中するところは1.6m 以上下層である。上層には新旧二面の水田床土がある。60cm ほど下層に平安時代の包含層、1.2m から1.2.5m ほどに古墳時代の包含層がある。弥生時代後期の層は不詳、1.4m ほどから弥生時代中期の包含層が始まり、中に砂礫層の窪地がある。その下層の土層については確認していない。

検出された遺構は、南から旧五反田井跡、阿島式土器を伴う集石 1、古墳時代の 5 号・10 号住居址・土坑 5 基、平安時代の 4 号住居址、古墳時代の周溝を持つ遺構、弥生時代中期の竪穴 9、平安時代の配石遺構、弥生時代中期の竪穴 11 等が並んだり、重複している。中央付近には砂礫層の窪地があって、その砂礫の上面から阿島式土器片が出土している。

阿島式土器の出土状態は、図 20 のように、竪穴 9 の周辺から北側の竪穴 11 にかけて広がっているが、とくに集中する所は、竪穴 9 と竪穴 11 とその周辺である。

### ② 弥生時代中期の遺構と遺物

#### ア 竪穴状遺構 9 (図 19・20・21・22・23)

B 地区のほぼ中央西側の 4 号住居址の下層に炭の堆積が広がり、その面から下に阿島式土器片が集中的に出土した。竪穴 9 である。径 4m ほどの不整形な竪穴で、検出面では深さ 30cm ある。検出された竪穴は東側のほぼ半分で、西側は古墳時代の周溝状遺構に切られている。竪穴の周辺を含めて図 22・23 の土器のほかに 250 点ほどの土器片が出土している。図 22 の 1 は竪穴の中央西側から出土した朱彩の壺形土器の口縁部で、口径 15cm、口縁の中側に張り出しを持つ特異な土器で、A 地区溝 4 の西側で発見された壺形土器口縁部と同型である。2 は竪穴の外縁東側で出土したもので、壺形土器口縁部半個体であるが、その辺りも薄い炭の層が検出されている。図 22 の 4~29 は壺形土器、図 23 は甕形土器で口縁の張り出しも多様である。網代・木の葉文の底部もある。

西側半分は周溝状遺構に切られていて東側の半分が残されている。掘り込みの壁は緩やか、床面は凹凸が多く平碗状の不整形な竪穴で、柱穴らしい落ち込みは検出されていない。図 20 の単点図でみられるように、土器片の出土は落ち込みの外縁にも広がり、とくに東側・北側から大きな土器片が出土している。未検出の部分が多いこともあるが、後述の竪穴 11 と共に課題の残る遺構である。

#### イ 竪穴状遺構 11 (図 19・20・21・24・25・26)

B 地区の北側 16~18 地区で検出された竪穴状遺構である。検出当初は砂礫層の堆積があり、有肩肩状形石器の出土があり注意はしていたものの、阿島式土器片の出土がなく注意が足りなかった。掘り

下げるうちに、阿島式土器が散見され、炭の面があつたり溝状の窪みがあつたので掘り下げる内に阿島式土器の集中する所が西側と東側にあつた。覆土の様相もはつきりしないので、土器片の出土を追う内にほぼ円形状の範囲が確認された状況である。とくに調査終了の時期の検出であったから、検出不備の多い結果でもある。土層断面を残してみて竪穴状の落ち込みが確認されている。

径3.2cmほどの円形状の竪穴で、上層には10cmほどの炭混じりの覆土がある。炭の固まりは北側の竪穴の外にあり、東西方向に横たわる炭材が検出された。西側には幅20cm・深さ5cmほどの浅い溝があり、西側に窪地があつて石が並び、阿島式土器片が出土している。この状態になるまでには日数を要していた。

阿島式土器片の出土状況を追う内に、半円形状の範囲であること、下層ほど黒色砂土は多くなり漸く落ち込みの様子を確かめることができた。東側の堆積土は古い時期の水田面で後世の大きな掘り込みで切り取られ、深い穴が掘られていたことも検出に手間取った原因でもある。また、南側の配石遺構にかかわる須恵器坏等の出土も包含層の確かめが遅れた一因でもある。

出土した阿島式土器は図24~26に記載されている。個体土器は発見されていないが、土器片の出土数はA・B両地区合わせて最も多く集中し、記録した土器片は500点を越える。中心部に当たる17グリットに集中している。底部には網代文が多くみられる。特殊な遺物としては図26の34の打製環状石器(径5cm)が出土している。

用地事情と調査期間の関係から東側へ拡張できなかつたことは口惜しいことである。集落の中でどう位置する竪穴遺構か、竪穴状遺構の性格等見極める重要な遺構の一つでもある。整理作業を進めてみて只ならぬ遺構に気づいた次第で、折が有れば東側を確かめたい遺構である。

### ③ 変形土器のいろいろ(図30・31)

A・B地区通して多くの変形土器口縁部が出土している。そこで口縁刻みのいろいろ・条痕文系のいろいろを掲げてみた。細かい分類は今のところ出来かねる状況であるが、三河系の櫛描文にかかわるもの、次期の北原式にかかわるもの・口縁の刻みにはいろいろなタイプがある等々で、更なる分類考察を試みたいと思われる。

### ④ 石器の分類(図33・34・35・36)

阿島式土器に伴うと思われる石器は、破片を含めて100点以上出土している。その内完形品45点と郭遺跡出土のものを載せてある。それを遺構別・形態別に掲げてみたのが表4である。打製石斧20・横刃形大7・有肩扁状形7・石包丁形9個で、通常住居址調査の例と大きく変わらないと思う。とくに種類別に揃って出土しているところは、A地区溝2のNo.16、B地区竪穴9・11で、有肩扁状形石器と横刃石包丁形石器の揃いに注意したい。打製石斧は大形なものが多く、とくに大きなものは、図33の1で、溝2のNo.16出土で、長さ26cm・最大幅8cmある。(表4)

表4 五反田遺跡出土石器の表

		打製石斧	横刃形	有形扇状	石包丁	合計
A地区	グリット2・3			1		1
	溝 4	1			1	2
	溝 2	No.15	2			
		No.16	4	1	1	8
		No.25	1		1	2
		No.26		1		1
	溝 1	3	1			4
B地区	グリット4・5	3				3
	竪穴9	1	1	1	2	5
	12~15	2				2
	竪 11	No.16	1			1
		No.17	3	2	2	9
		No.18			2	2
	合 計	20	7	7	9	43

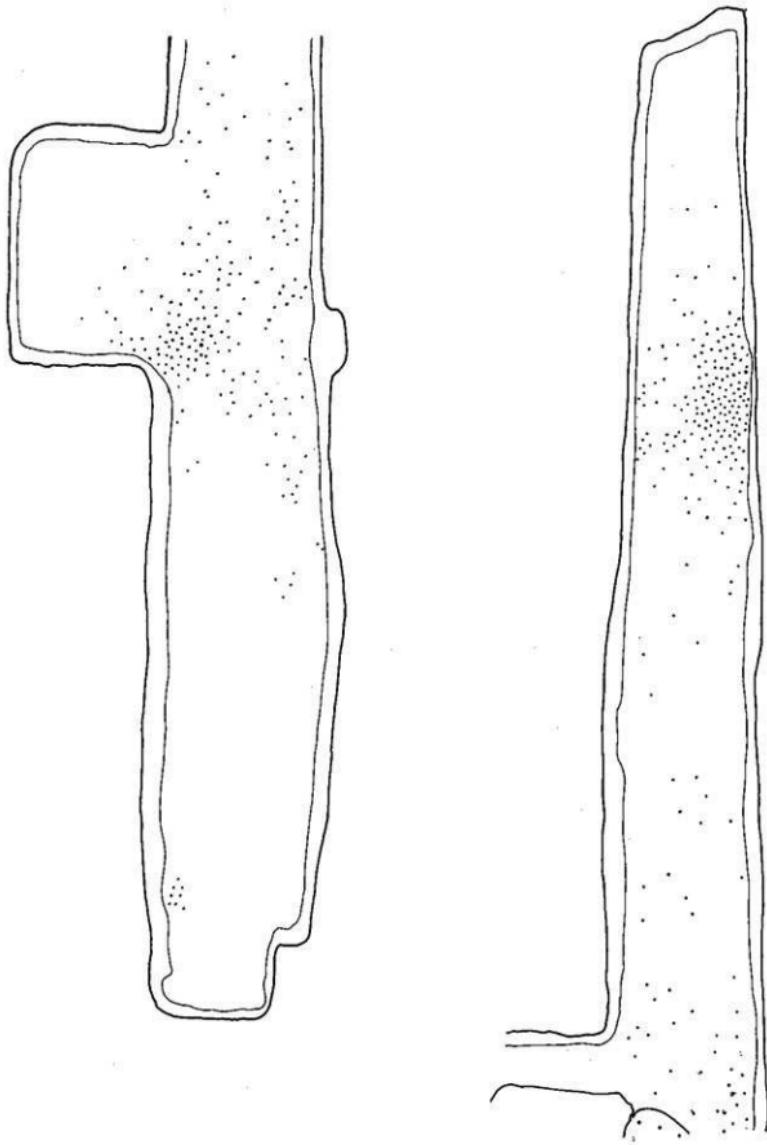


图20 B 地区阿岛式土器出土分布图

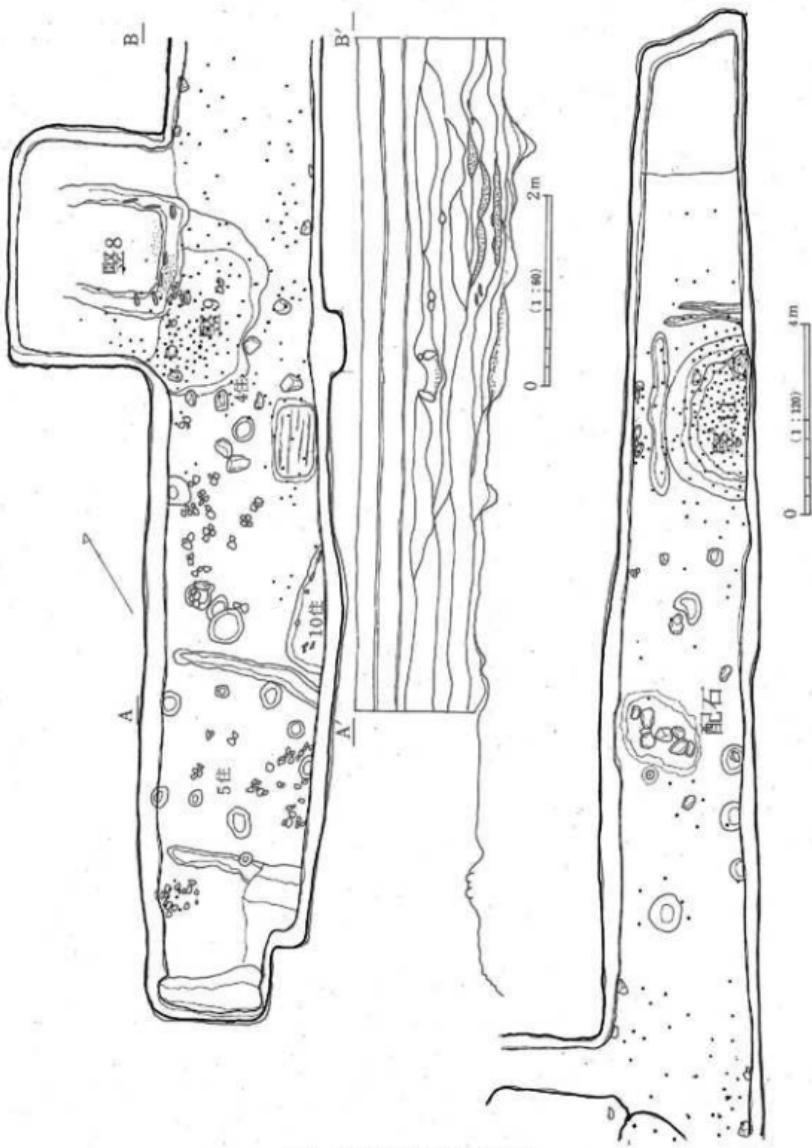


图20 B地区阿鲁式土器出土分布图

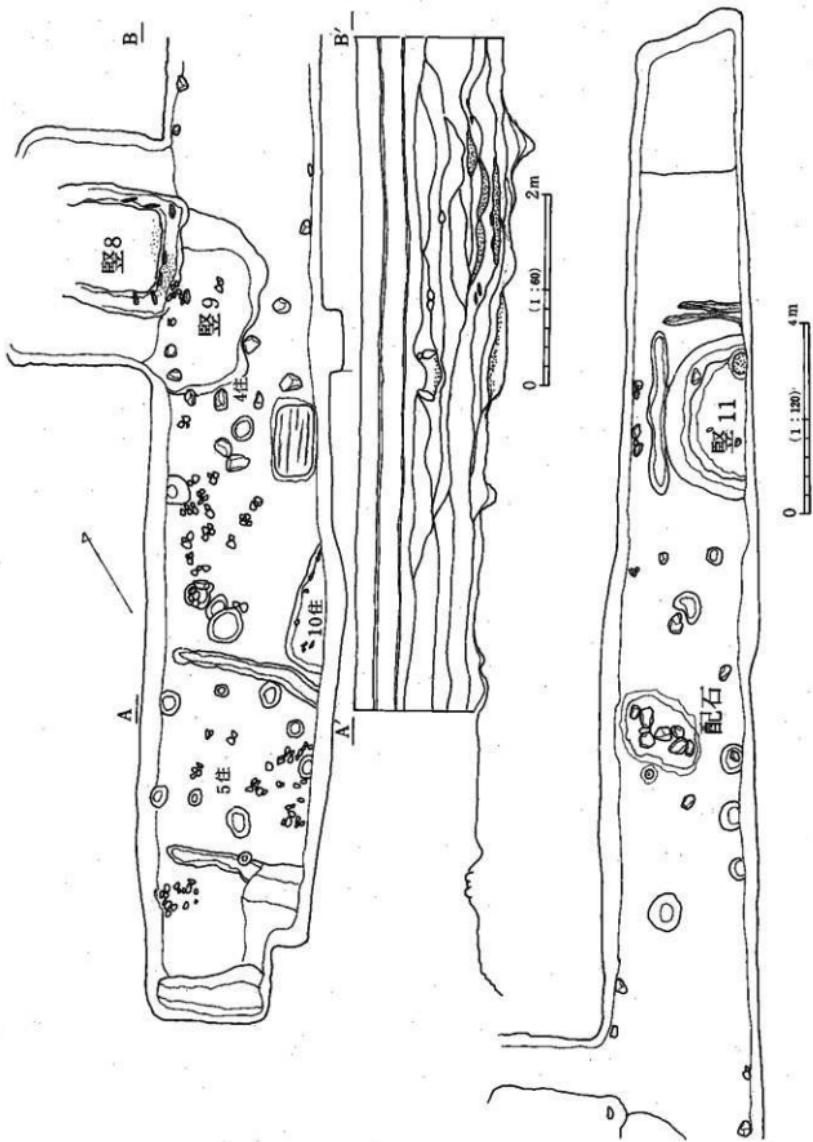
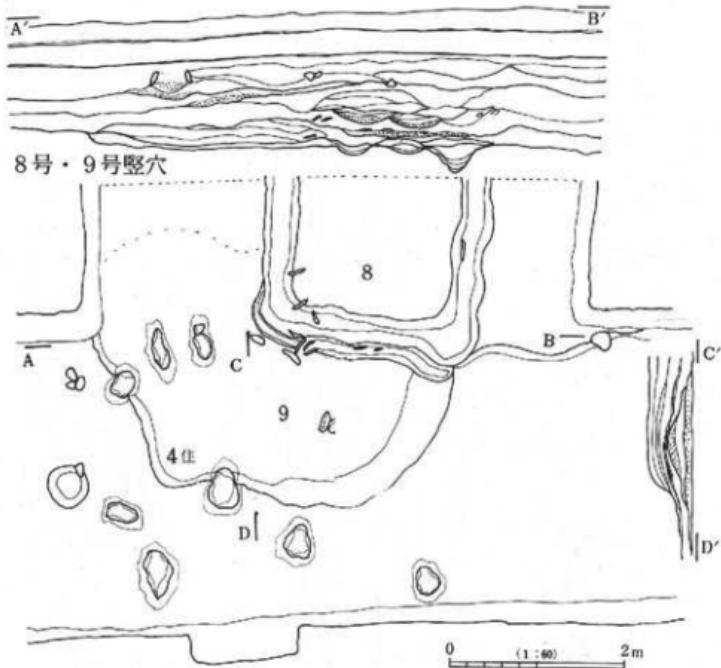


图19 B地区造構全体図



11号竖穴

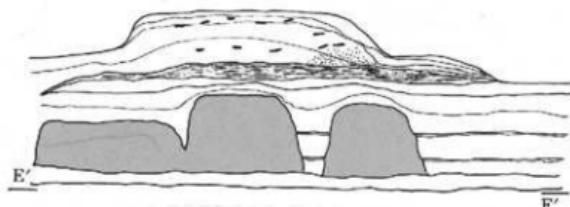
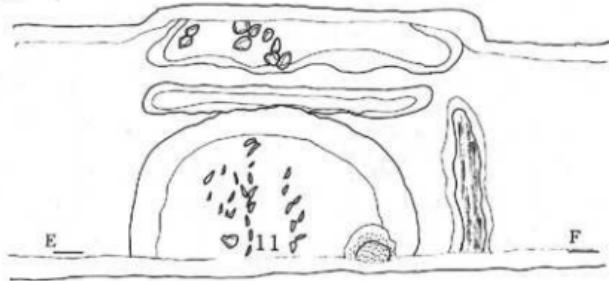


図21 B地区竖穴8・9竖穴11造構図

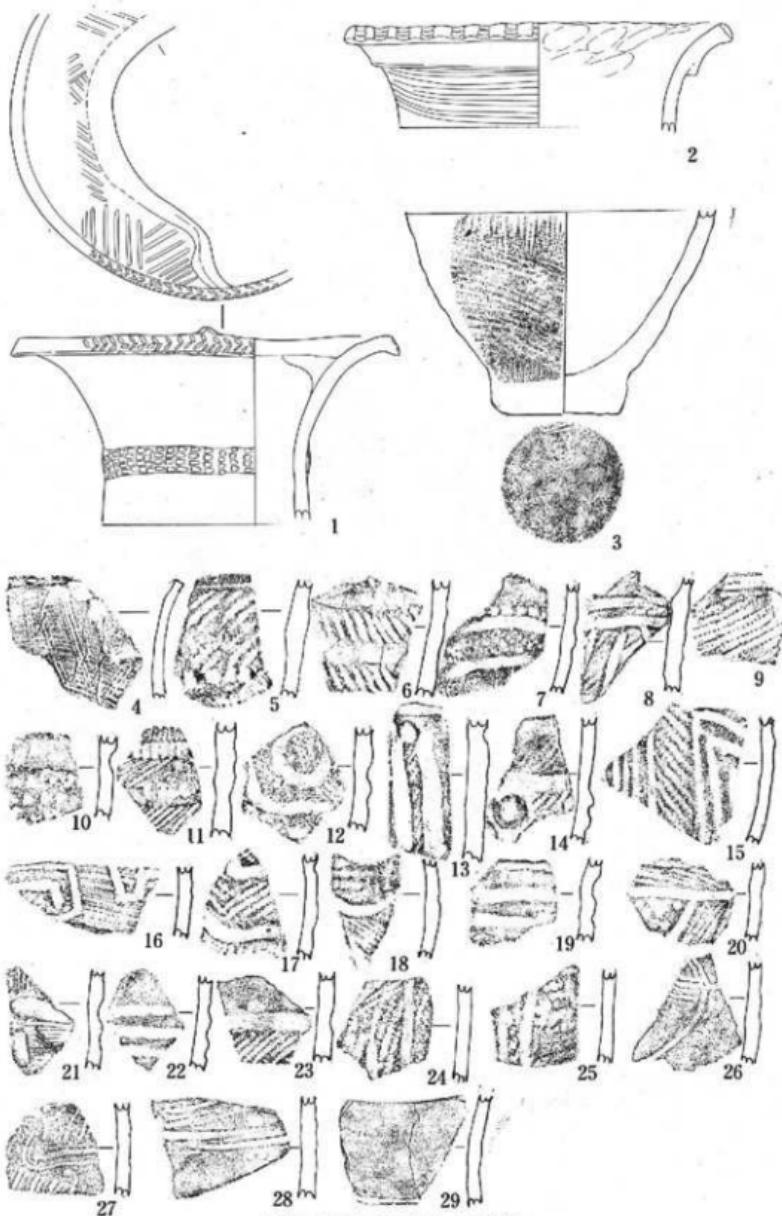


圖22 B 地區豎穴 9 出土 壺形土器

堅9

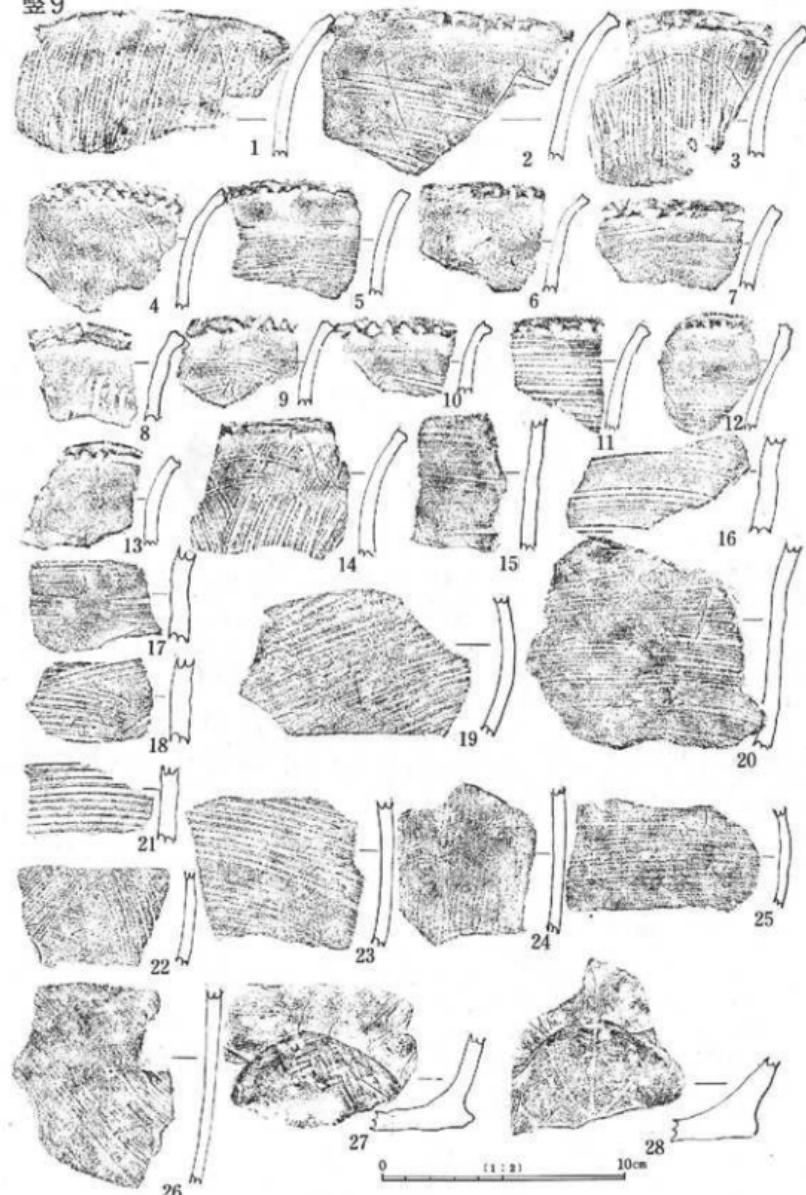


图23 B地区坚穴9出土夔形土器

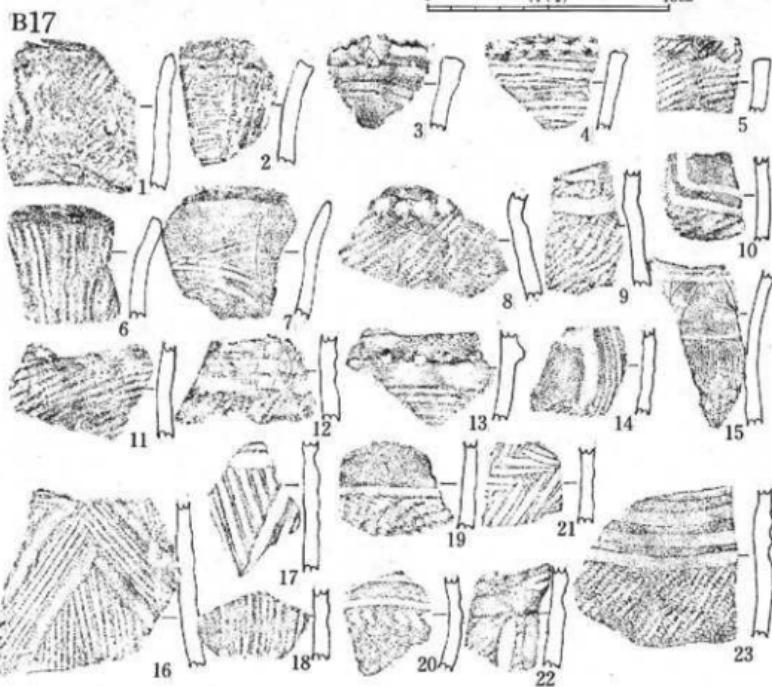
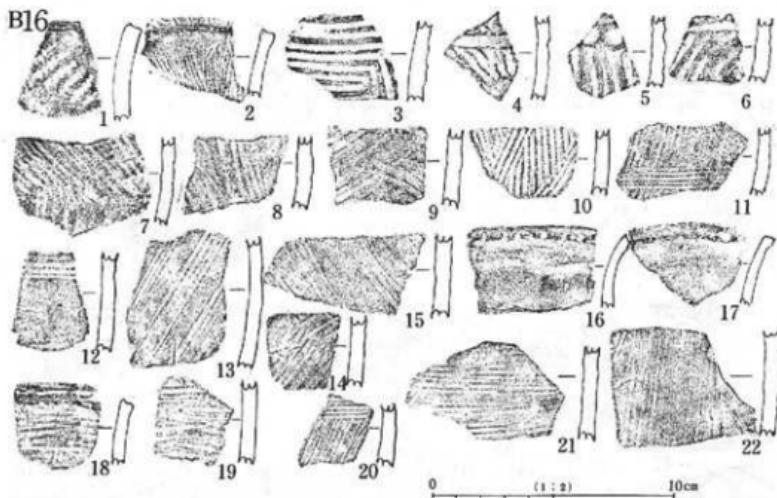


図24 B地区堅穴11出土土器 (1) (B16・17)

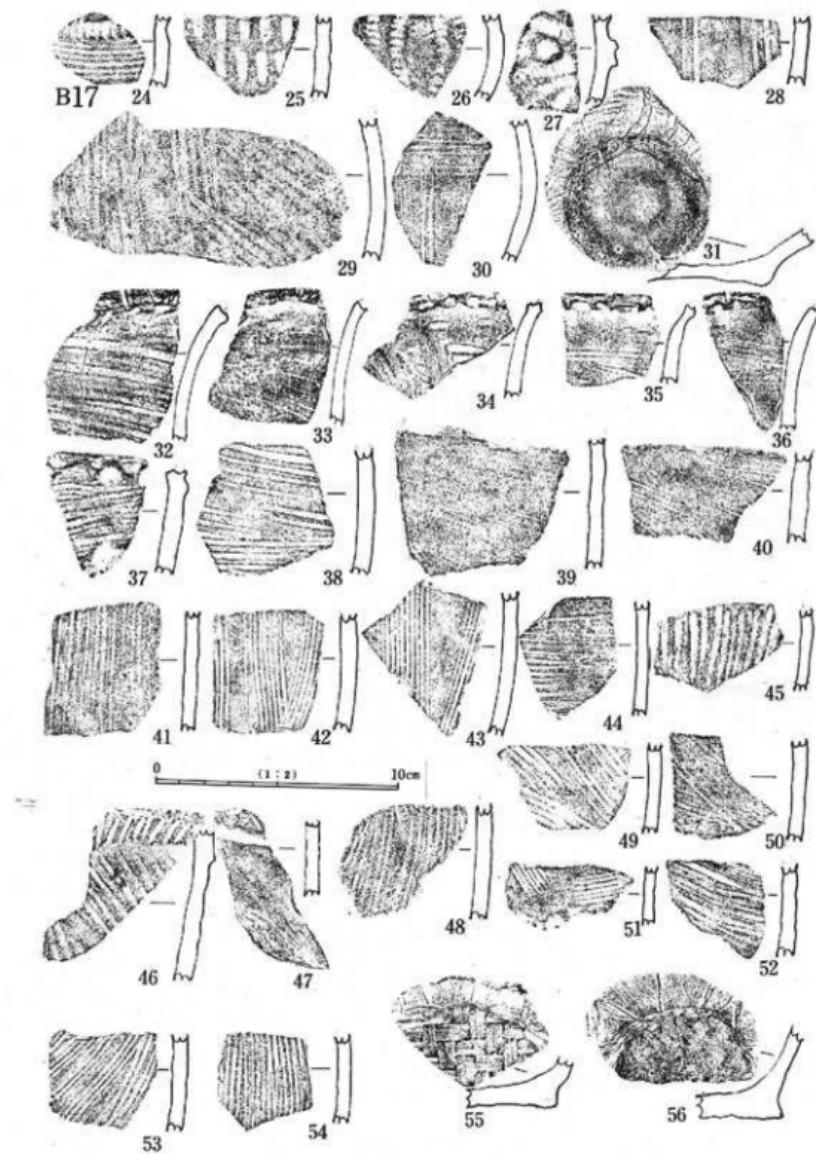


图25 B地区竖穴11出土土器(2) (B17)

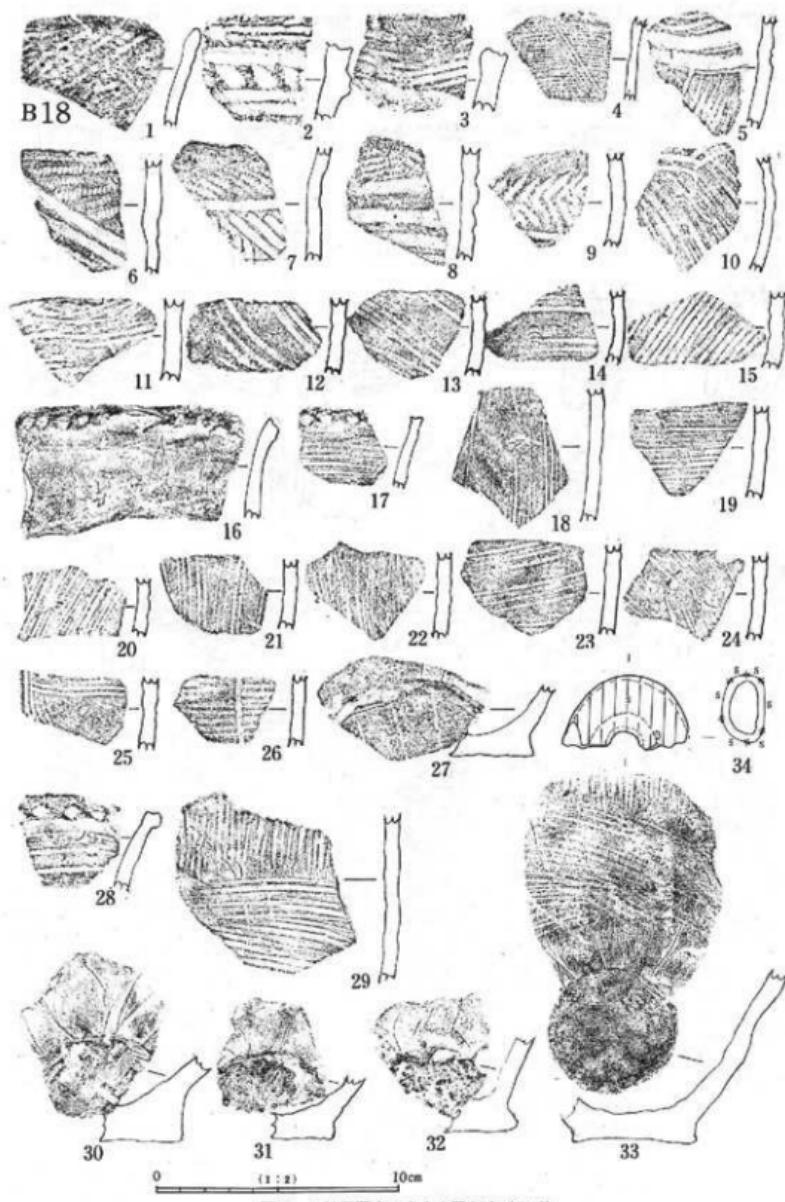


图26 B地区竖穴11出土土器(3) (B18)

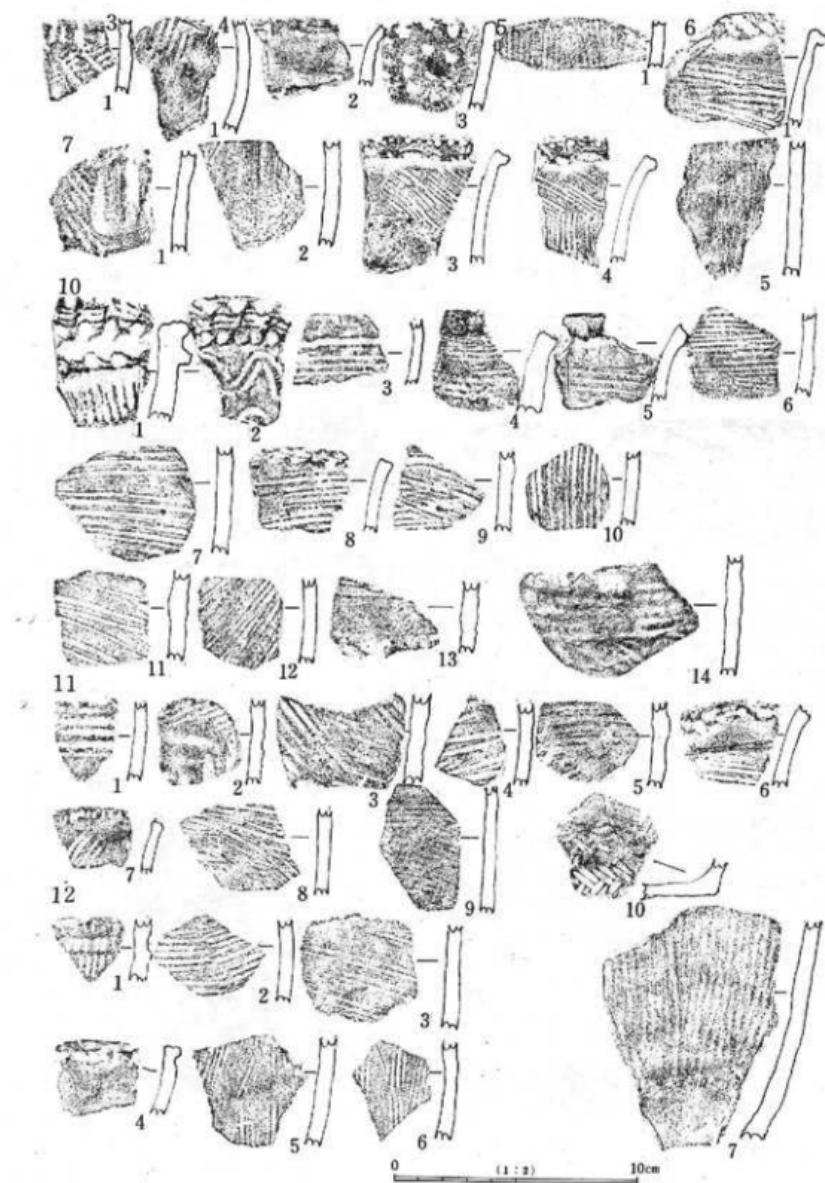


図27 B地区各グリッド出土土器(1)

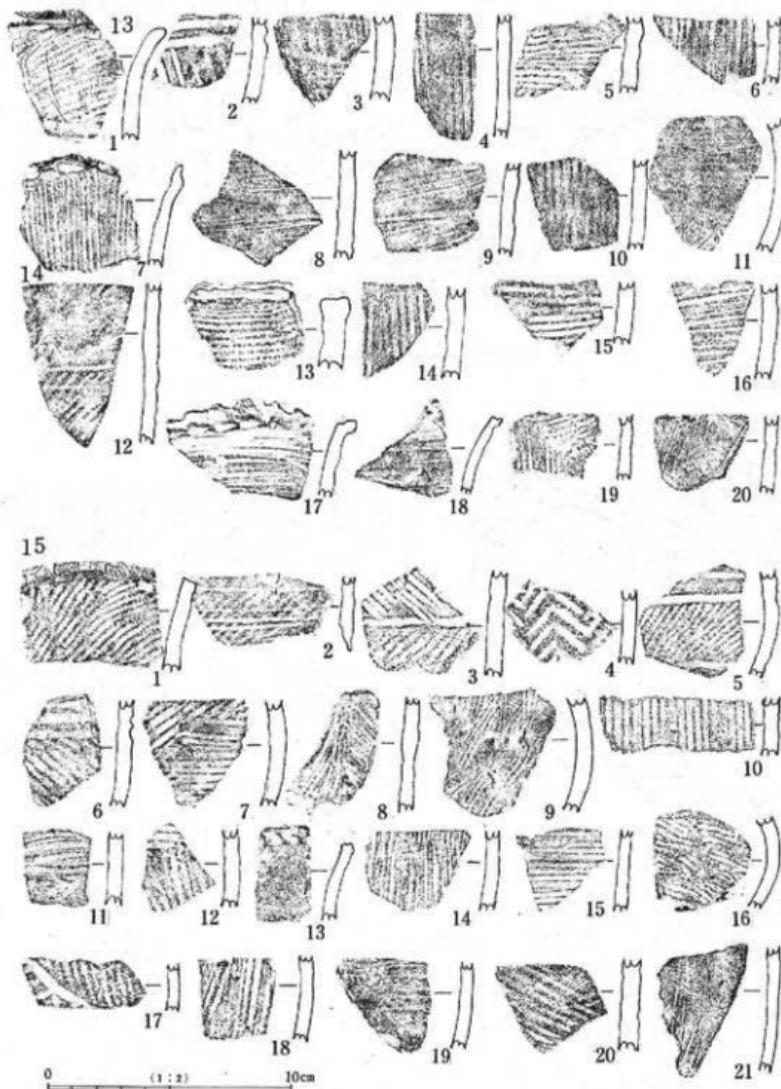
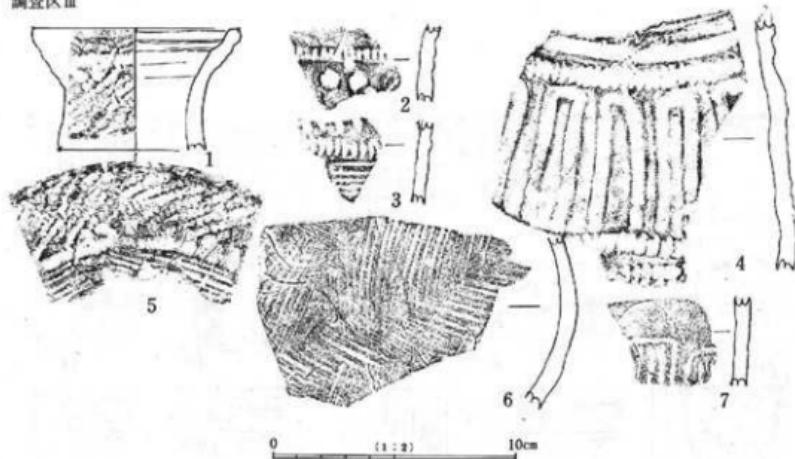


図28 B地区各グリッド出土土器(2)

調查区III



郭遺跡

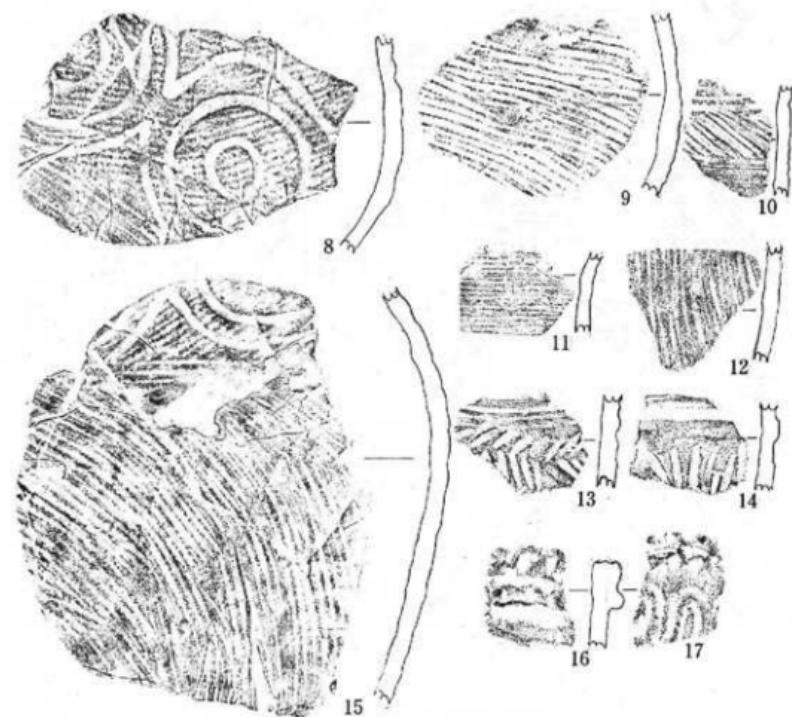


図29 調査区III、郭遺跡出土土器

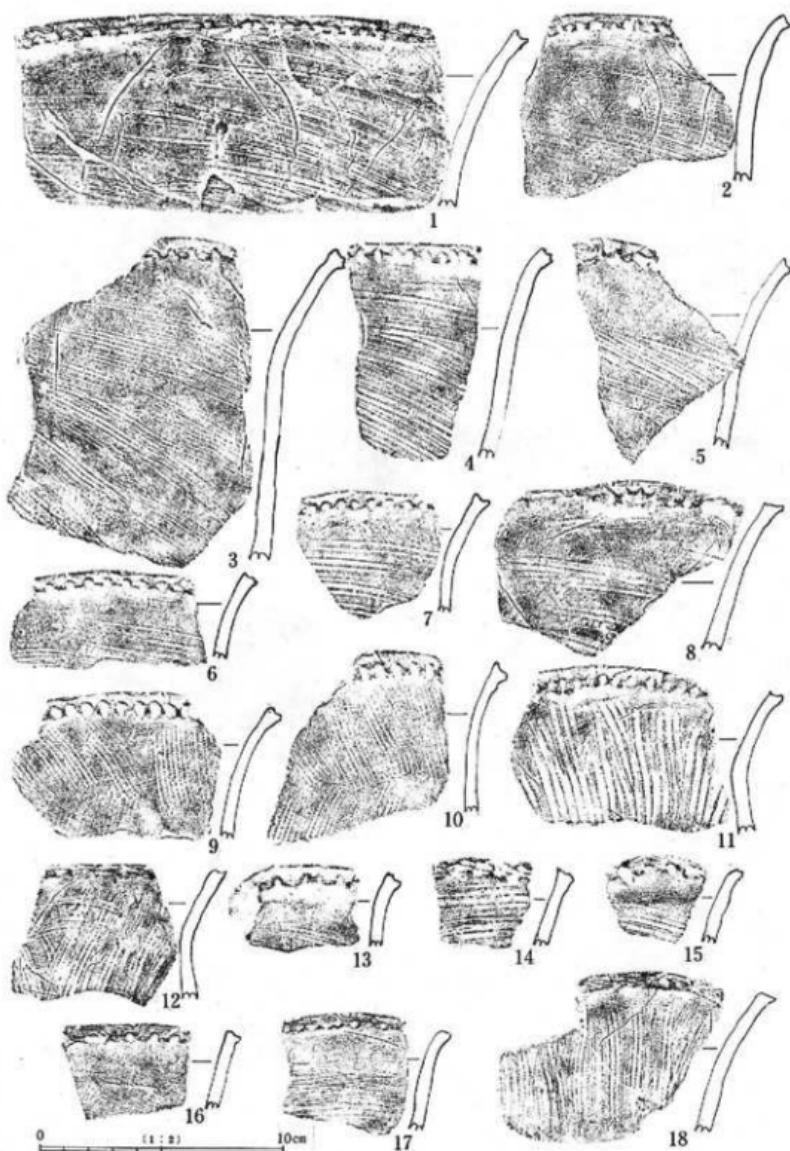


図30 築形土器の分類(1)

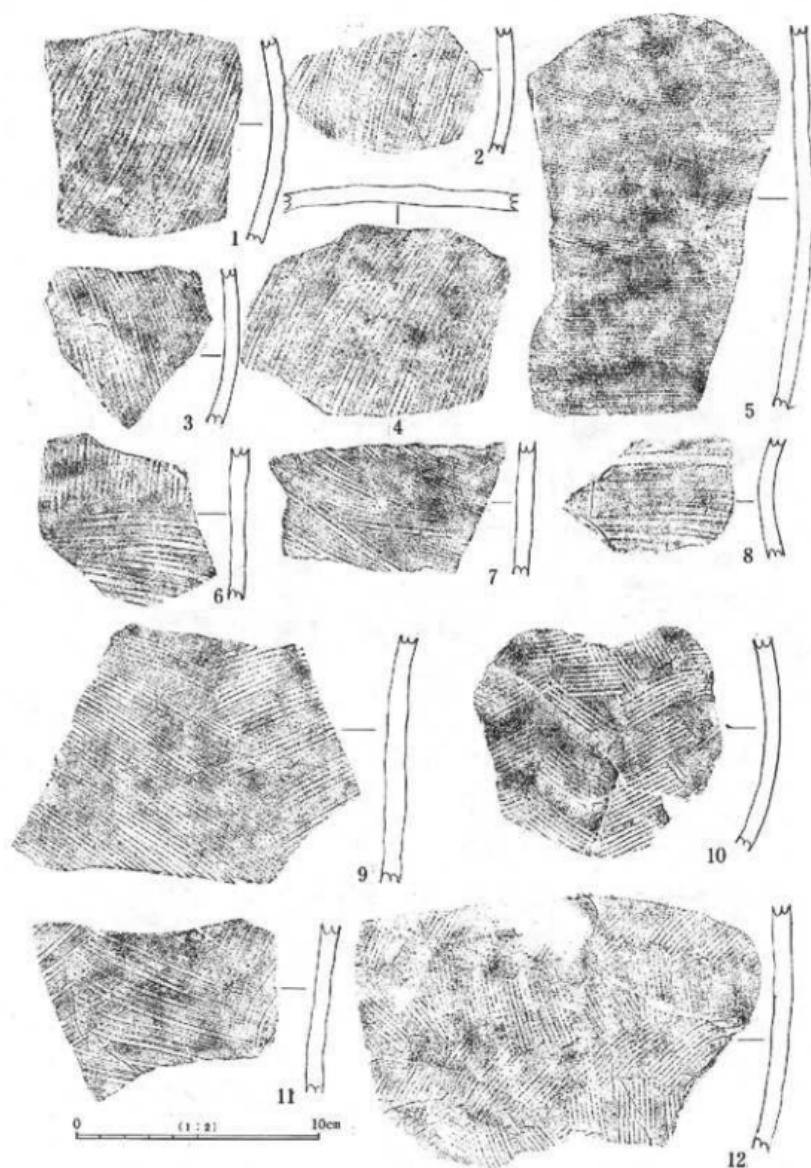


図31 変形土器の分類(2)

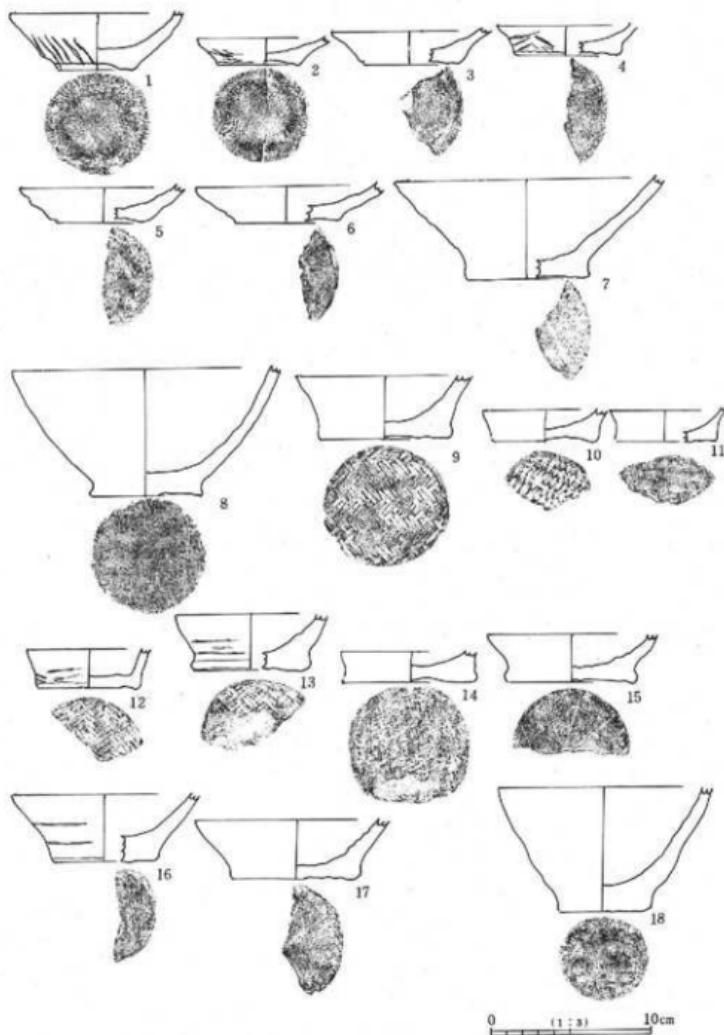


図32 壺形土器の底部

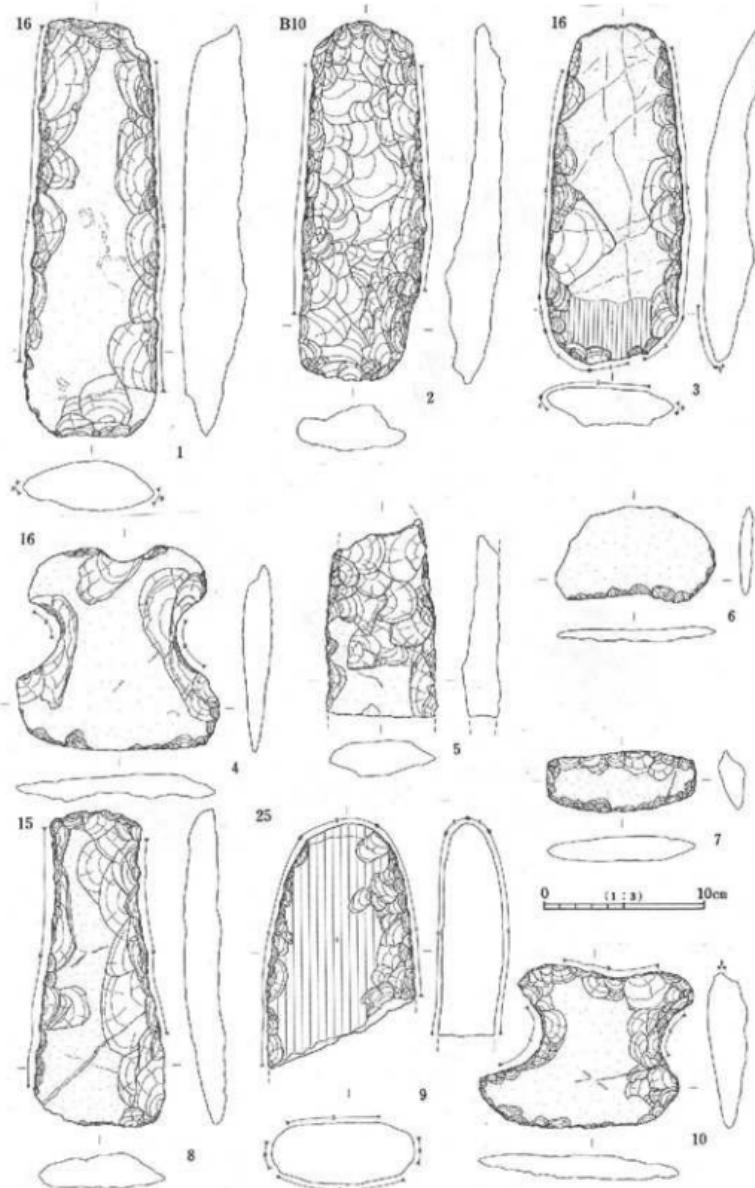


图33 A地区溝状道構2出土石器 No.15, 16, 25

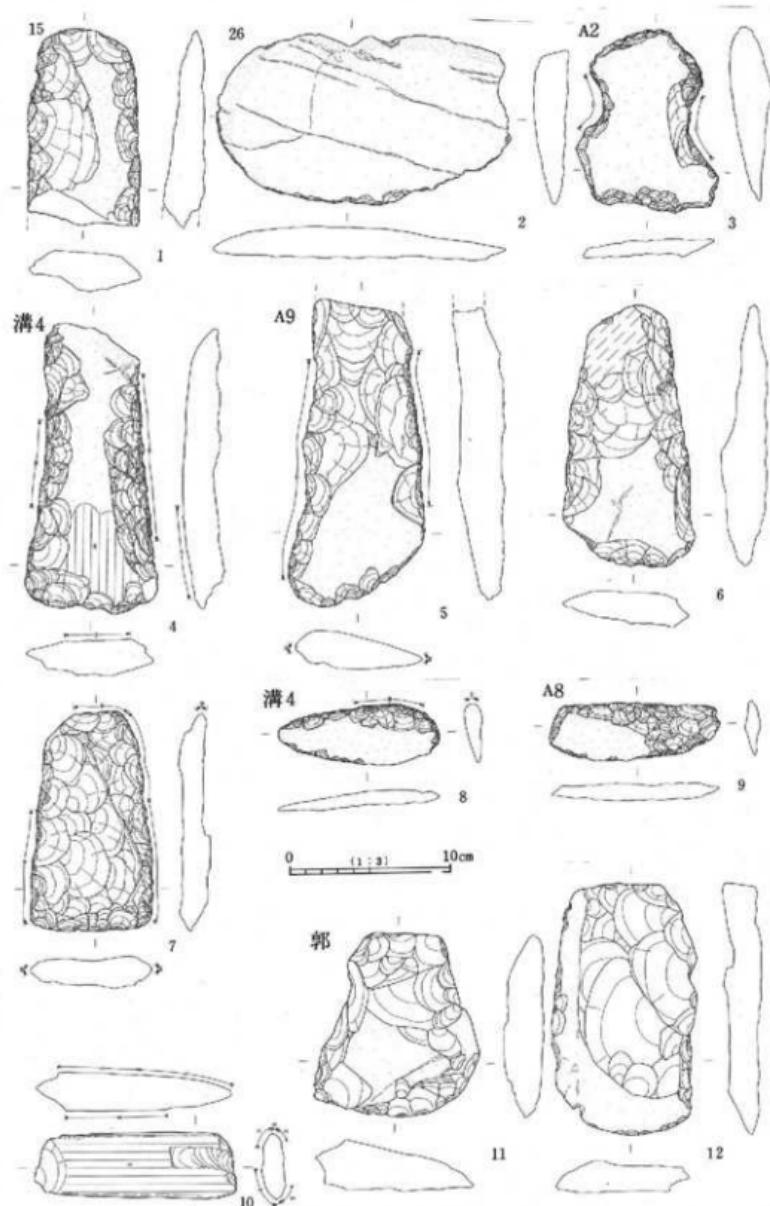


图34 A地区溝状造構1・4ほか出土石器

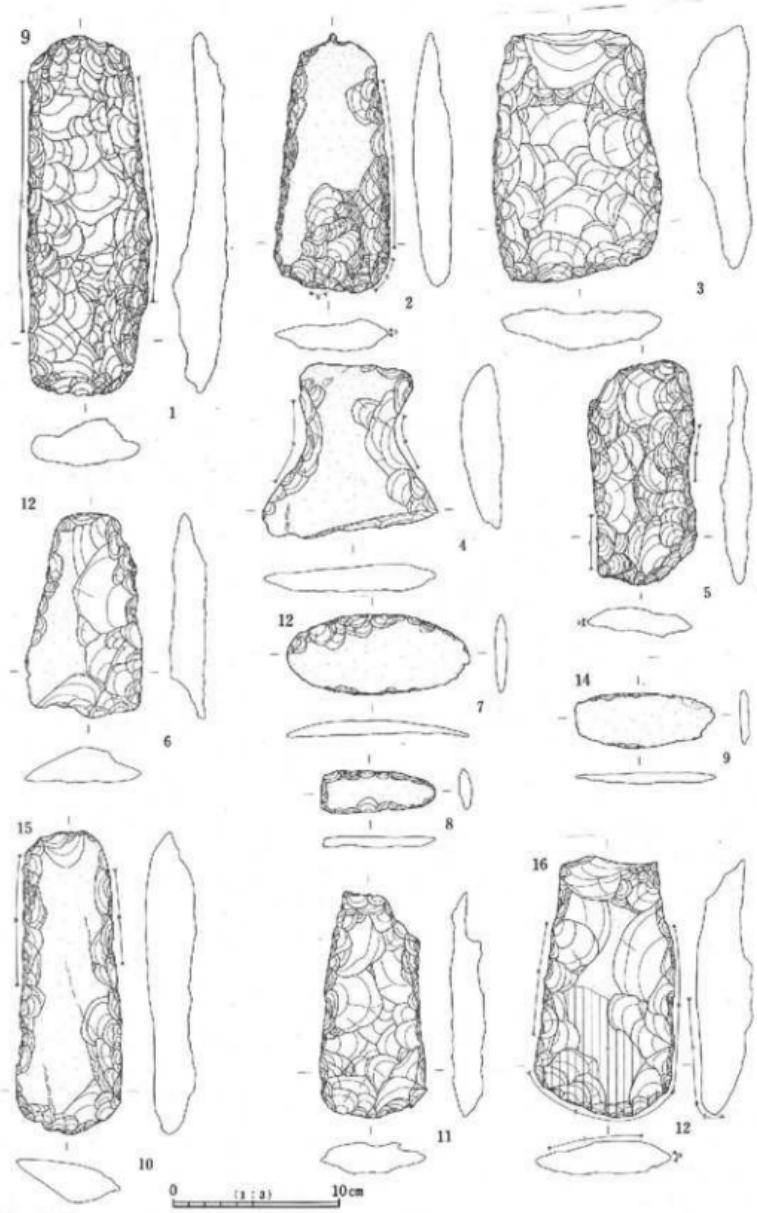
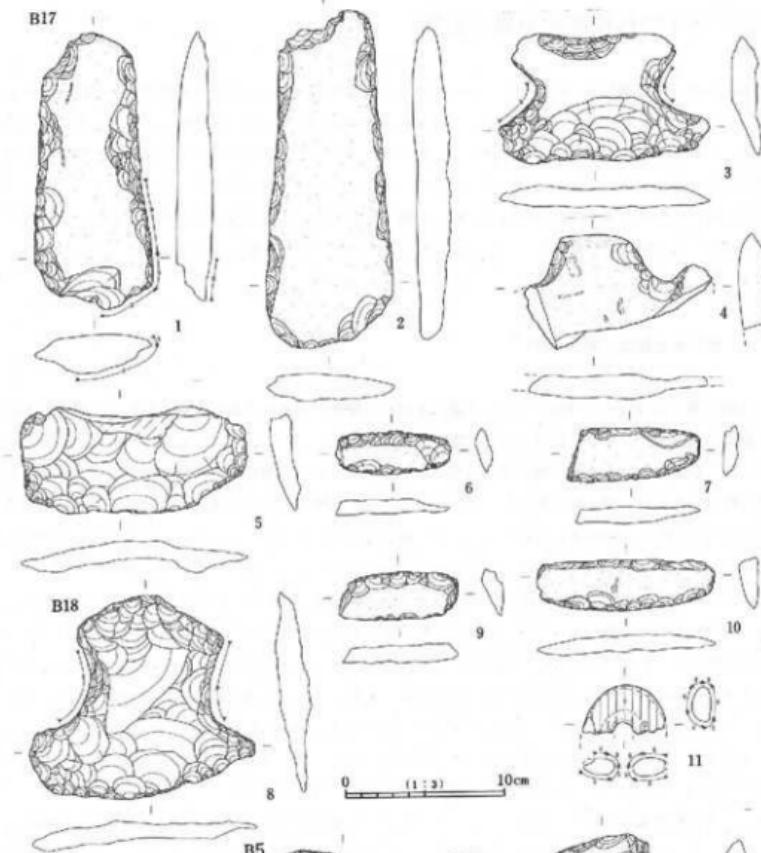


図35 B地区9号窓穴と北側出土石器

B17



B4

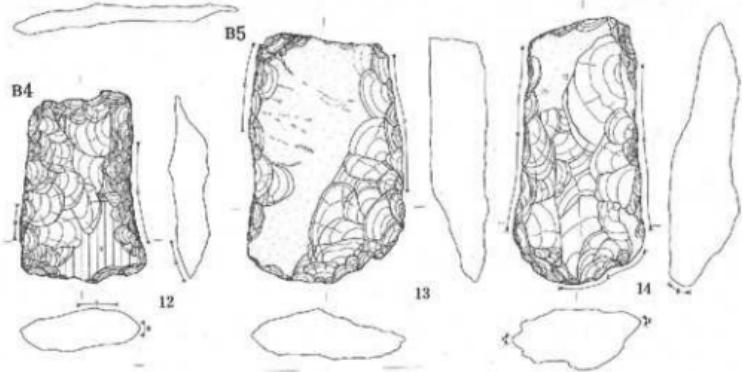


図36 B地区11号竪穴グリッド4・5出土石器

## (2) 弥生時代後期の遺構と遺物

昭和36年の試掘調査で、表土下やく1mの所から弥生時代後期の住居址が検出され、五反田地域全城からこの期の土器が表面採集されるので、遺構・遺物の発見が予想されたが、A地区の北側で中島式の合わせ土器棺が出土し、近くの西側で土器集中、A地区南側で弥生時代後期座光寺原式の壺形土器胴部が発見されたに留まっている。B地区では散見的に弥生時代後期の土器片は出土しているが、古墳時代の住居址や平安時代の住居址・配石遺構、阿島式土器片の上層包含と重複するために、弥生時代後期の包含層は確かめられていない。地域全体の地形状況・旧来の表面採集調査によれば、この時期の集落の存在は予想されるところである。

### ① 合わせ土器棺 (図5・37)

A地区溝1のほぼ中央(図5の22)で溝の上面から横倒しの壺形土器が発見された。この壺形土器の胴部に穴を開け、それに被せるように壺形土器が置かれていた。図37の5のようである。取り上げてみたら胴部の穴は大きく、壺形土器は割られて被されたものと思われる。復元してみると胴幅に大きな違いがあるが、幾つかに割られて被せてあった。この壺形土器の底部も切り取られて、壺形土器の口辺内部へ差し込み内蓋の役目をしていた。横倒しに置かれる例はよくあるが、壺形土器と壺形土器のあわせの例、壺形土器の底部を蓋状に用いた例は少ない。

図37の1・2は本体の壺形土器で、口径17cm・器高39.5cm、胴部最大幅はほぼ中央辺りで、28cmある。口縁は緩やかに外反するタイプで座光寺原式と中島式の様相を持っている。口辺と頸部に波状文、肩部に四分の一同心円文が並ぶ。胴部は大きく搔き取られその穴は径20cmほどある。この穴に被された壺形土器は復元すると口径19.5cm・器高22cmで口縁が平なほど外反する中島式の壺形土器である。復元すれば底部が密着するが、剥がされて壺形土器の内蓋に用いられている。

胴部穿孔・横倒しの状態・配置の場所から土器棺である。溝1は検出面では上部に位置するが、実際には中腹に置かれたものと思われる。溝1と溝2を弥生時代中期のもので、仮に墓地的な遺構とすれば、先期の遺構を利用した墓地と云うことになる。時期は異なっているが、集落の特異な遺構群の一つとした注目される遺物である。そうなれば、弥生時代後期の住居址は何処にあるのか、次項の土器集中地も一つの候補でもある。

### ② 土器集中地 (図38)

土器棺から約2m西側の壁に沿って2カ所から中島式土器の固まりが発見された。その遺構のあり方は不詳であるが、表土下60cm、土器棺との層位は30cmほど高い位置にある。出土した土器群は図38の土器で、2は典型的な中島式の壺形土器口縁で壺形土器の口縁等もある。器形・文様はいろいろあるが、波状文・単線縞状文等から中島式の土器が主かと思われる。土器出土の土層・位置・集合状態からすれば、近くに住居址の存在も予想される。包含層もやく1mという状況は、住居址が検出された調査地Ⅲに類似している。

### ③ その他の地域

A・B地区とも小破片は含まれているが、文様・器形の判る土器は左記の通りである。弥生時代後期の集落もあると思われるが、今回の調査範囲は弥生時代後期の遺構・遺物が少ないところかと思われる。

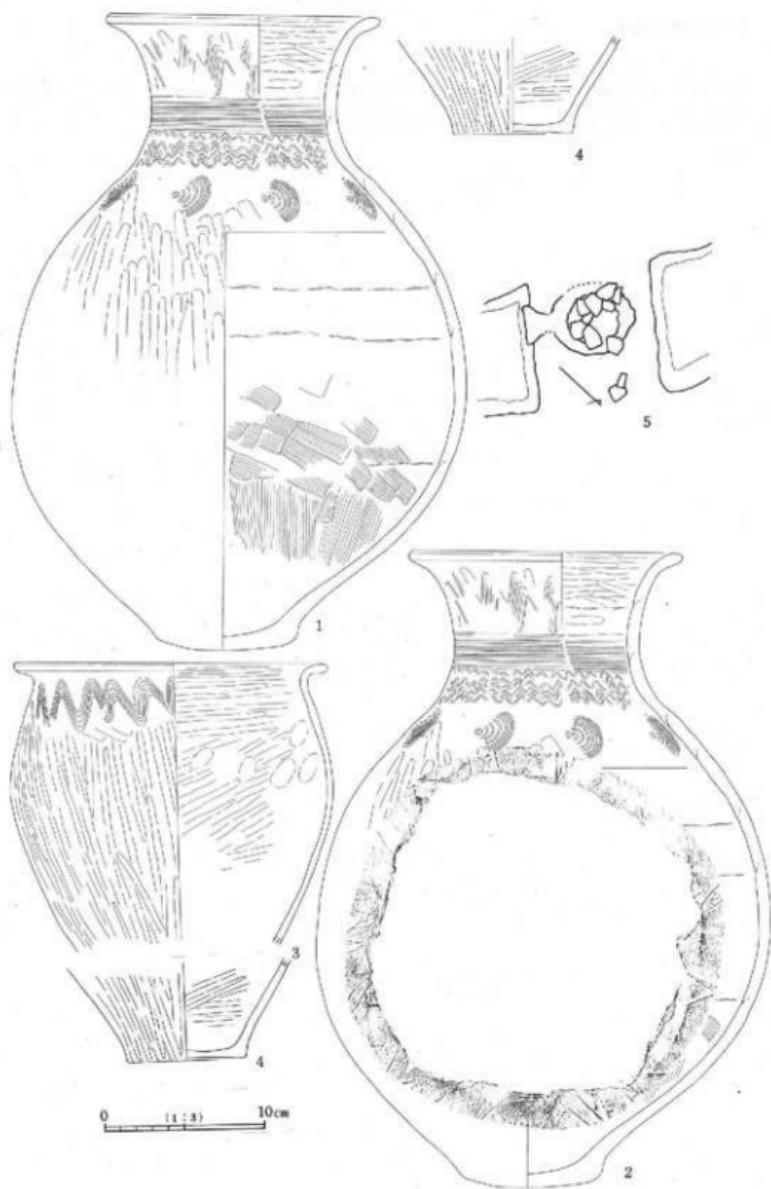


図37 A地区溝状造構1出土土器(合わせ土器箱)

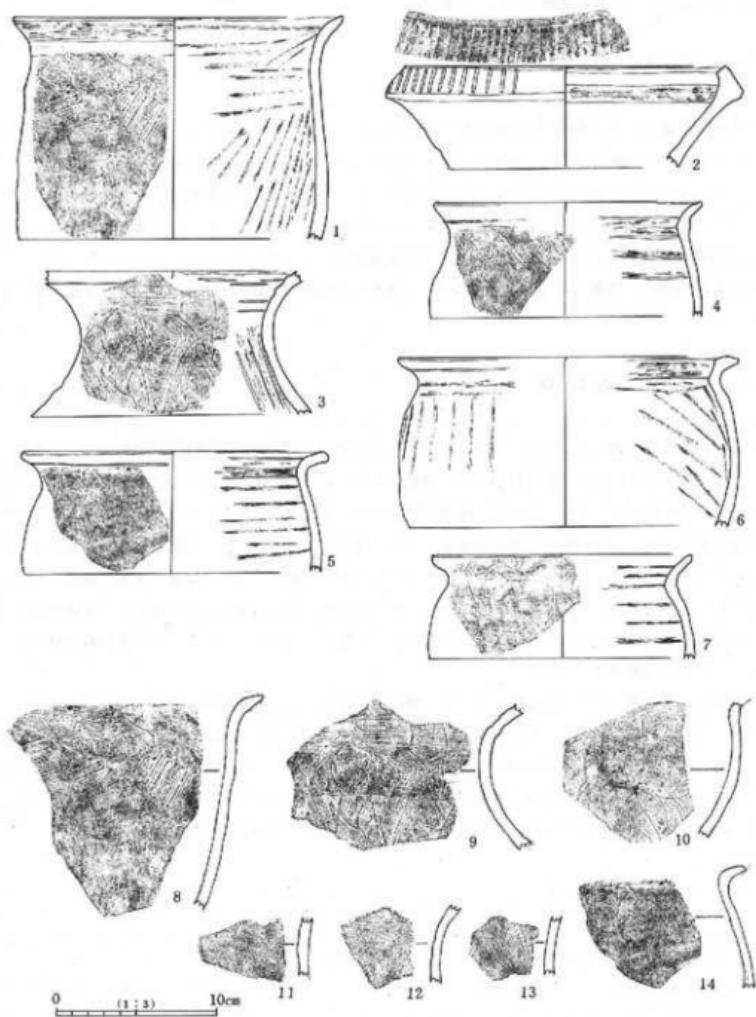


図38 A地区出土弥生時代後期の土器

### (3) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構が検出されたところは、A地区では溝状遺構3と6号住居址、B地区では5号住居址・10号住居址と周溝状遺構（8号）である。

#### ① 6号住居址（図4・5・39）

A地区的溝1・2の東側に竪穴住居址の一部が検出されている。不整形な方形竪穴で多くは用地外に広がっている。確実な一辺が判らないが4~5mほどの住居址かと思われる。西側の穂群からみると40cmほどに壁があり、竪穴の深さは30cmほどある。北側の壁添いに数個の石と焼土が検出される。カマドに近いと想像される。床面は軟弱気味で凹凸が多く、西側壁から1mほど離れた所に、径50cm、深さ45cmほどの落ち込みのほかは柱穴状のものは確認されていない。

出土遺物はこの時期としては非常に少なく、器形の判るものは図39の13の小形碗形土器1個に留まっている。

#### ② 溝状遺構3（図4・39）

A地区的南側、溝4を切るように溝1・2と方向を違えた溝がある。溝幅は西側で1.5m、東側で1mほど、深さは検出面で40cmほどある。溝底は平坦で径20~30cmほどの平石が敷き詰められ、石の上には焼土や炭が厚く堆積している。溝壁も平状に削り落とされ、明らかに人工的に構築された整った溝である。石の上や石間に土器片は出土するが、固まった所は少ない。南側の東方向に壁に添って大形な土器片が固まって出土している。その多くが図39の土器で、1~3は壺形土器口縁部、4・5は壺形土器で共に内黒、7~9は高杯形土器、10は胴幅48cmほどの瓶形土器の胴部片で全体器形の判る土器はない。11・12は大形な土製紡錘車が混じって集中して出土している。この土器群は壁に張り付き、下に炭の層が残っていた。

形態は整った溝で例の少ない溝であるが、構造的には手の込んだ構築物で、焼土や炭の充満する状況に注意が必要と思われる。時期は異なるが、弥生時代中期の溝状遺構1・2、弥生時代後期土器棺と同じ小高い位置に構築された祭祀的な要素の高い溝では無かろうかと思われる。そうなると、溝底の石敷・焼土や炭の堆積状況から祭祀的遺構ではなかろうかと思われる。A地区全体が、弥生時代中期・同後期・古墳時代の祭祀または墓域であるとするならば、重要な遺構群と思われる。

#### ③ 5号住居址（図40・41）

B地区的南側で検出された方形状の竪穴住居址で、東側と西側調査地外へ続いているのではっきりしないが、南側で4.5m以上の長方形の竪穴かと推定している。検出当初から古墳時代の遺物出土が多く、その内に焼土の中に多くの土器片が混ざる状態が続いた。竪穴の落ち込みが判断し難くて、最終的に焼土面を床面と判断して検出を進めた住居址である。床面と思われる所は、焼土面を除けば砂利を含む黄土で凹凸が多い。覆土の黄褐色土であることから識別が困難であったが、南北両側に幅25

～30cm、深さ7～8cmほどの溝がある。東側中央付近に焼土がとくに多いので、壁奥にカマドの所在を推定したが確実なことは分からぬ。主柱穴もやや位置が不揃いであるがP1～P4と想定している。ピットの規模・構造も不整形である。その他にも補助柱穴もある。

出土した土器の量は多いがこの時期としては完形品ではなく、半完形品も少ない。図41の1～7は小形を含めた變形土器片で、口縁部の外反の少ないタイプが多い。8・9は坏形土器、10～13は須恵器の坏・蓋坏の蓋等である。高台付のもの・平底で糸切底である。14～16は變形土器の底部で、特別の施紋はみられない。この時期のものかどうか不詳であるが、北側の平安時代のものも含まれているようと思われる。上層から細い環が出土している。

變形土器の口縁の張り方、高台付きの須恵器の出土、土器片のあり方から古墳時代後期の住居址では無かろうかと思う。やや離れてはいるが、平安時代の住居址に近いところであるから遺物の混入もあるかと思われる。

#### ④ 10号住居址（図40）

5号住居址に接するように東側の壁際に竪穴住居址の一部が検出されている。西側の壁添い焼土と小石が混じった所があり、土器片が出土しているが、大部分は小破片である。古墳時代の住居址である。

#### ⑤ 周溝を持つ土盛り状の遺構（図19・21・42）

B地区の中央やや南側に4号住居址（平安時代）と竪穴9（弥生時代中期）の重複したところにさらに重複して検出された特殊遺構である。上層の4号住居址と下層の竪穴9の検出中に、西側壁添いに溝状に落ち込む窪みから焼土に混じって古墳時代の大形土器片が集中出土した。そこで、この部分に限って6などほど西側へ拡張した。拡張部分から阿島式土器片が10数片、古墳時代の大形土器片數片が出土したと留まつた。調査期間終了間近であったので、掘り下げを中断した。測量中に先の溝に統きそうな溝が両側に並ぶので、図化したものが、図19の想定図である。名称も「周溝を持つ土盛り状の遺構」とした。溝の正体は確かめて無い。前述の竪穴11と同様検出未了の遺構である。

図42の土器は、1～5は東側の溝から出土した變形土器、6は瓶形土器の把手部、11～14は變形土器の破片、9・10は東側溝に統く窪地出土の高坏形土器で、東側に多く西側からの出土が少ないことを示している。

検出状態が不十分であるが、想定通りの遺構であるとするならば、A地区の溝3と共に、古墳時代にも特異な遺構の存在が想定される。

#### ⑥ 土坑状の遺構

5号住居址の北側に3基の土坑が重複し、その北側に2基検出されている。それぞれ古墳時代の土器片が出土している。この辺りは小礫群や砂質層の堆積する所で、やや窪地地形の所であった。

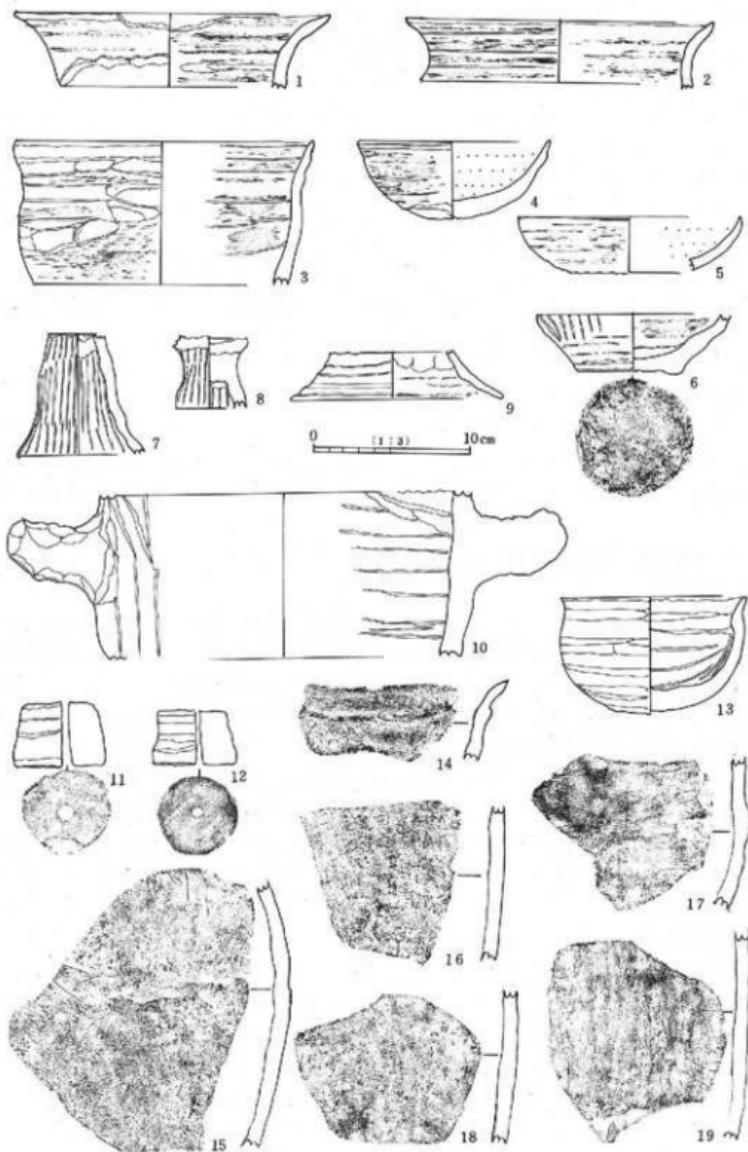


图39 A地区满状遗模3、6号住居址出土土器

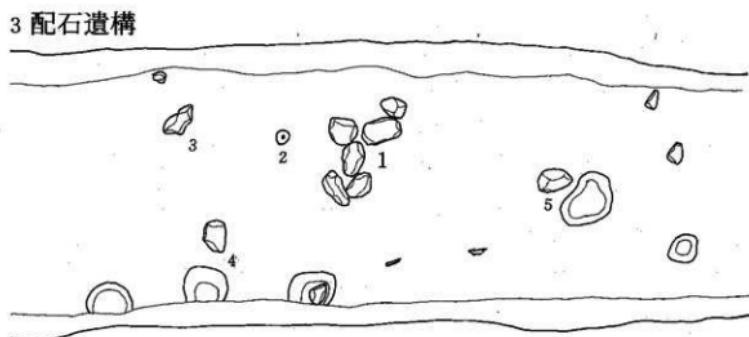
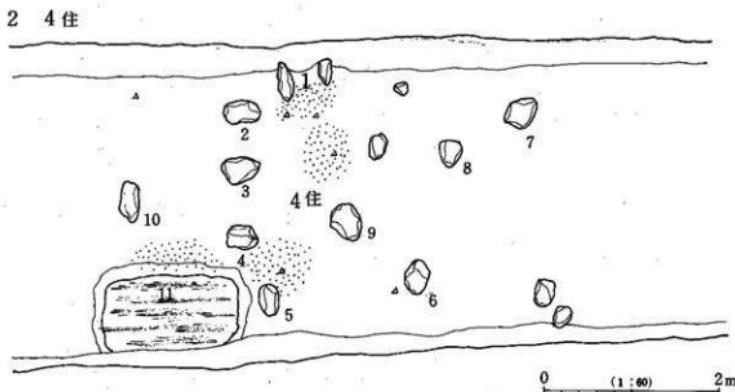
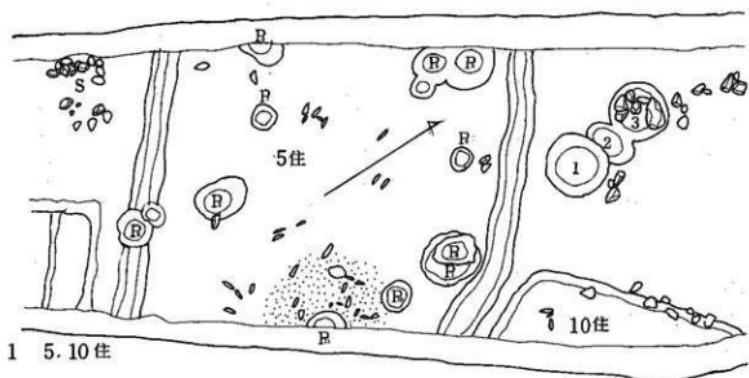


図40 B地区 5号・4号住居址、配石遺構